

愛媛県歴史文化博物館

研究紀要

第九号

二〇〇四年

資料紹介

「明治三十七、八年戦役二於ケル

野戦砲兵第十一連隊ノ戦歴

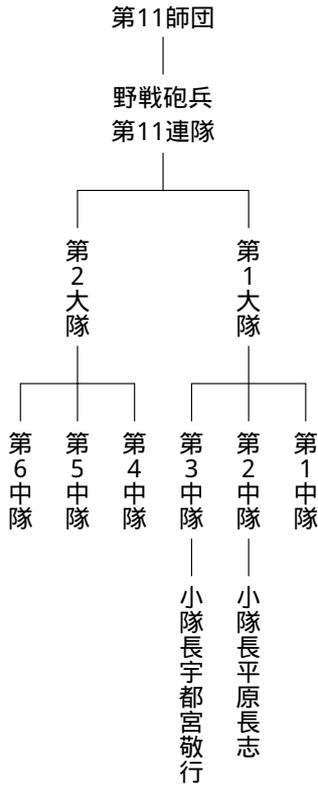
旅順要塞攻囲戦ノ巻」(上)

平井 誠

一 資料の伝来

本資料は、平成十四年度村上綾子氏より当館へ寄贈された。村上綾子氏は、三崎町に柑橘栽培を導入した宇都宮誠集氏の娘である。宇都宮誠集氏の弟宇都宮敬行氏(1879~1951)の養子となった。宇都宮敬行氏は、明治三十七年に起こった日露戦争に従軍した。香川県善通寺市に置かれていた第十一師団野戦砲兵第十一連隊第一大隊第三中隊に属し、少尉として小隊長の任にあつた。本資料の奥書によると、本資料は筆写本である。原本は、明治四十四年に平原長志氏がまとめた。同第二中隊に属し、中隊こそ異なるが、宇都宮敬行氏と同様、少尉として小隊長の任にあつた。そのため、宇都宮敬行氏と平原長志氏は親交があつたと思われる。そこで、大正五年に宇都宮氏が原本を借り受け、妹の緑氏に筆写させた。それが本資料である。以後、本資料は、当館に寄贈されるまで、村上氏が保存されてきた。

< 連隊編成 >



二 資料の内容

- 第一編 動員下令ヨリ対敵行動ニ移ルマデノ状況
 - 第一章 動員実施ノ状況
 - 第二章 待令間ノ状況
 - 第三章 船舶輸送
 - 第四章 上陸後ノ行軍
- 第二編 旅順要塞前地ノ諸戦闘
 - 第一章 南沙河口附近ニ於ケル攻囲戦線ノ編成
 - 第二章 六月廿六ヨリ七月廿五日ニ至ル間ノ状況
 - 第三章 七月廿六ヨリ二十八日ニ至ル大白山攻撃
 - 第四章 七月三十日ノ前進
 - 第五章 大小孤山ノ攻撃
- 第三編 旅順要塞戦闘
 - 第一章 攻撃準備
 - 第二章 旅順要塞第一回総攻撃
 - 第三章 八月二十五日ヨリ十月二十五日ニ至ル状況
 - 第四章 旅順要塞第二回総攻撃
 - 第五章 第二回総攻撃結了ヨリ第三回総攻撃開始迄ノ状況
 - 第六章 旅順要塞第三回総攻撃
 - 第七章 第三回総攻撃以後十二月十七日ニ至ル状況
 - 第八章 東鷄冠山北砲台ノ攻撃

第九章 十二月二十日ヨリ三十一日ニ至ル狀況

第十章 明治三十八年一月一日ヨリ旅順開城ニ至ル狀況

第十一章 旅順開城及其ノ後ノ狀況

第四編 給養及衛生

第一章 給養

第二章 衛生

附録、附表、附图（附图は略されている）

本資料は、26.3×18.5×2.5cmの冊子である。目次の通り、四編二十二章から成る。本資料の引用図書として、『野戦砲兵第十一連隊陣中日誌、全戦闘詳報、全第一第二大隊戦闘略歴、全第一乃至第六中隊戦闘略歴、旅順方面ニ於ケル第三軍戦闘詳報第一乃至第十号、旅順方面ニ於ケル第十一師団戦闘詳報悉皆、露軍ノ行動第九卷、肉弾』が掲出されている。目次や引用図書からも分かる通り、本資料は動員命令から旅順攻撃までの戦闘と行軍状況を、多くの一次資料に基づいて作成されたものである。師団長や連隊長の命令内容のほか、附表として死傷者・入退院患者・発斃馬・人馬補充・弾薬消費一覧表なども収録されている。一部皇国史観を背景とする主観的な記述も見られるが、当時の時代背景を考えれば、全体として客観的な記述と言える。本資料は、平原長志氏がまとめた原本の筆写本であるため、平原長志氏及び第二中隊の視点であることを留意しながら解読せねばならない。

日露戦争については、県内にも『愛媛の郷土部隊』（河合勤 愛媛文化双書刊行会 1988）や『二十二連隊始末記』（客野澄博 愛媛新聞社 1972）などがある。これらは、松山に置かれていた歩兵二十二連隊に関するものである。しかし、野戦砲兵をはじめ、他の部隊は善通寺に置かれ、県人も多く入隊した。本資料の紹介により、日露戦争の実態のみならず、他の部隊にも関心を向けることができらばと思う。

なお、資料紹介は分割とし、今回は、第二編第五章までを紹介する。

三 今回の紹介

第一編 動員下令ヨリ対敵行動ニ移ルマデノ狀況

第一章 動員実施ノ狀況

明治三十七年四月十九日に動員命令を受けた。馬匹徴発や沿岸監視の出張、人馬の受領分配、新馬の装蹄調教、兵器被服の授受整頓など準備を進めた。在郷軍人も遅刻不参はなく、気力体力も現役に譲らなかつた。徴発馬は、性格に強弱があり、馬格も劣等なため、装蹄調教に苦労した。調教の結果、ひとまず任務に堪え得るに至つたが、戦時馬匹の大部分を徴発馬に求めたため、運動性は減じることとなつた。馬匹改良の必要性を訴えている。

第二章 待令間ノ狀況

二十九日に動員完結し、翌三十日に武装検査を実施した。動員完結後は、射撃術、徴発馬の調教、行軍力の錬成に努めた。雲辺寺原での実弾演習、週二回の行軍錬成を行い、堪えられない者は補充隊と交代した。最も困難を感じたのは、徴発馬の調教であつた。待命期間中、三回外出を許可し、面会は日を定めた。補充隊は市街に宿営したため、風紀の維持が困難となり、花柳病（性病）の発生を恐れた。

第三章 船舶輸送

五月十九日に乗船命令を受けた。二十一、二十二日の両日に讃岐丸他計六艘に分乗して詫間港を出航した。瀬戸内海、下関、対馬、朝鮮沿岸、長山列島を経て、二十五日以降遼東半島に上陸を開始した。しかし、暴風のため上陸作業は難行した。第一、第二中隊は二十七日に上陸を完了したが、他の中隊は遅れた。この間遙か西方の南山から、露軍を攻撃する第二軍の砲声が轟き、諸種の風説は兵士の神経を刺戟させた。

第四章 上陸後ノ行軍

各中隊の上陸完了日は、第一、二中隊が二十七日、第三、四、五中隊が二十九日、第六中隊が三十日であった。上陸後は、順次金州方面へ行軍した。三十日に先着していた将校は、二十六日に第二軍が攻略した南山の戦跡を偵察した。露軍は天然の要害に堅固な防御設備を完成させ、百門近い砲台と数条の鉄線がはりめぐる半永久的築城であった。南山の攻略は、露軍を旅順へ撃退させ、大連を掌中に収めた。その後、大連方面へ行軍した。

第二編 旅順要塞前地ノ諸戦闘

第一章 南沙河口付近ニ於ケル攻圍戦線ノ編成

三十一日に第十一師団は第三師団と交代し、新編成の第三軍に入つて旅順攻略の任務に就いた。六月一日に第六中隊が追及し、連隊全部が各大隊地に集中した(前章参照)。食事は米飯に缶詰等、調味料は粉味噌や醤油エキス等、生肉野菜は稀であった。野戦郵便は、回数制限や検閲があつたが、大いに歓迎された。大阪毎日新聞が日々新聞を寄贈し、内地の出来事や戦況を知ることができた。二十一日に物資徴集の注意等が訓示された。

第二章 六月廿六ヨリ七月廿五日ニ至ル間ノ状況

第十一師団は、二十六日に鶏冠山と歪頭山、夕刻に剣山と老坐山付近を占領した。剣山戦の戦死者は、日本軍百三十五名、露軍百三十三名。三日から五日にかけて、露軍の剣山回復攻撃を受けた。五日には双頂山の第二中隊が艦砲射撃を受けた。五日以降露軍は防衛工事を行い陣地を堅固にし始めた。射程距離発射速度で劣っていた砲兵は、九日に増援された。二十三日には双頂山付近から老坐山付近の露軍を攻撃した。

第三章 七月廿六ヨリ二十八日ニ至ル大白山攻撃

二十六日に大白山から安子岑を経て双台溝の線にある露軍を攻撃した。日本

軍の兵力は露軍の二倍であった。老坐山を占領して大白山の攻撃に着手した。しかし、露軍の陣地は堅固な上、王家屯付近の砲兵に苦しめられるなど苦戦し、二十八日ようやく占領した。大白山戦の損害は、露軍二千四十名、日本軍二千九百十九名。露軍の軍医が、人力車と担架を指揮して眼下に突撃し、死傷兵を収容する姿を見て、露兵でなくてはできない仕事と記している。

第四章 七月三十日ノ前進

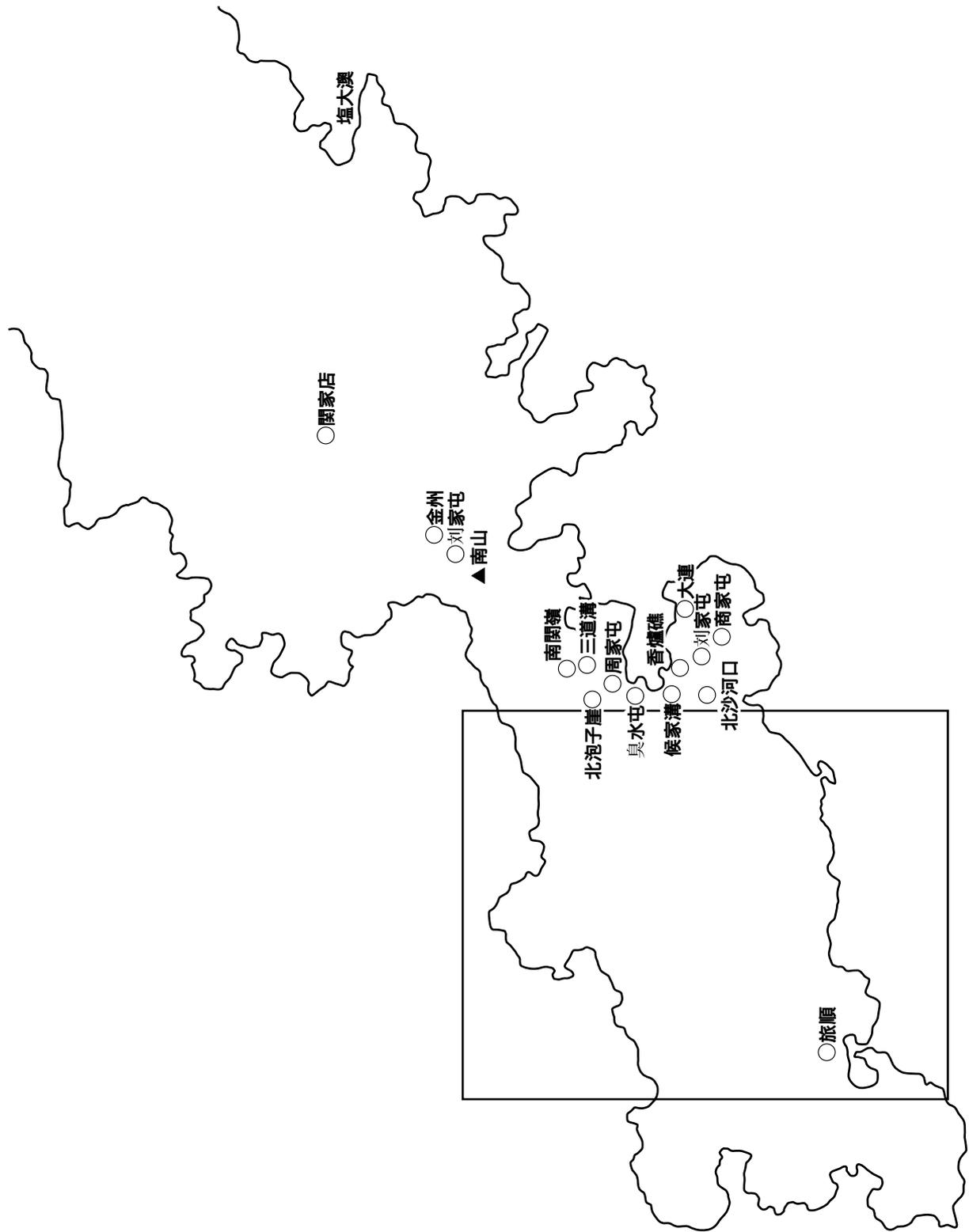
大白山戦に敗れた露軍は、旅順要塞に退却するか、鳳凰山付近で抵抗するかをめぐり、第四師団長と要塞司令官の間で意見が分かれた。結局大孤山から大山を経て鳳凰山の線を守備することに決した。三十日に露軍は日本軍との不利な戦闘を交え、大小孤山のみを維持するにとどまった。炎暑の中、連日昼夜の戦闘を行い、雨露に濡れ、給養と睡眠不足で疲労は尋常でなかつた。さらに水質の不良、群蟻の発生もあり、日々数十名の入院患者を生じた。

第五章 大小孤山ノ攻撃

日本軍は、大小孤山の露軍から俯瞰された上、長射程の六門の砲台が少なからぬ損害を与えると危惧した。そこで、八月七日に大小孤山の露軍を攻撃した。要塞砲火の下での攻撃であった。露軍の艦砲射撃もあつて苦戦したが、八日に大孤山を、九日に小孤山を占領した。大小孤山戦で消費した弾薬は五千二百五十八発。弾薬の欠乏を感じるに至つた。十一師団の死傷者は千五百十二名。その多くが艦砲射撃によるものであった。

凡例

- 一、文字は原則として常用漢字を用い、常用漢字にないものは正字を用いた。但し、人名・地名は表記のまま記した。
- 二、誤字・脱字は(ママ)(カ)と傍注、虫損・汚損などによって文字が判読できない箇所は 示し、平出は一マスあけとした。
- 三、読みやすくするため、適宜読点を施した。



關係略地図

拡大図 關係略地図

明治三十七、八年戦役ニ於ケル野戦砲兵第十一連隊ノ戦歴

旅順要塞攻圍戦ノ巻

序文

抑モ我連隊ハ、明治二十七年、八年日清戦役後ノ軍備拡張ニ伴ヒ、初テ弧々ノ声ヲ四国ニ掲ゲ、爾來數閱年平和ノ間ニ着実ナル進歩ヲ遂ゲ、初代ノ連隊長出石大佐(退役少将)、第二世瀬名大佐(後備役少将)、第三世足立大佐(少将)等、能ク之ヲ指導シテ連隊ノ名声日ニ赫々ノ度ヲ加ヘタリ、然レドモ惜哉、未ダ光輝アル戦歴ヲ有セズ、明治三十七年偶々世界最強ノ陸軍国タル歐羅卜干戈ヲ交フルニ至リ、初メテ多年鍛鍊ノ真価ヲ発揚シ、光輝ト名誉トヲ以テ、我連隊ノ歴史ヲ修飾シ得ルニ至レリ、

凡ソ国ニ歴史アリ、家ニ家系アリ、連隊亦歴史ナクンバ百世ノ後ヲ如何セン、我連隊素ヨリ規定ノ連隊、歴史ナキニ非ズ、戦闘詳報、陣中日誌又悉ク備ハレリト雖、旅順攻圍ノ戦歴ニ関シ、戦史的記述ノ未ダ備ハラザルヲ、後世ノタメニ深く遺憾トスル所ナリ、茲ニ於テ予ハ菲才ヲ顧ミズ、時ノ連隊長庄司大佐ニ乞ヒ、滿州駐屯第二年ノ冬季作業トシテ、本問題ノ解決ニ一幅ノ微力ヲ竭スコトナレリ、

然レドモ我レ元ト史家ニ非ズ、又文筆ノ徒ニ非ズ、唯之レ起々タル一介ノ武辨ノミ、孰ンゾ能ク此ノ目的ヲ達成スルヲ得ン、而モ尚進ンテ其衝ニ当リシモノ、唯時日ノ経過ト共ニ光輝アル連隊歴史ノ煙滅センコトヲ虞シタルノミ、

明治四十四年三月十日奉天会戦第六年後ノ紀年日ニ際シ、海城砲兵隊官舎ニ於テ記ス、
陸軍砲兵大尉 平原 長志

目次

宣戦ノ詔勅

第一編 動員下令ヨリ対敵行動ニ移ルマデノ状況

第一章 動員実施ノ状況

第二章 待命間ノ状況

第三章 船舶輸送

第四章 上陸後ノ行軍

第二編 旅順要塞前地ノ諸戦闘

第一章 南沙河口附近ニ於ケル攻圍戦線ノ編成

第二章 六月廿六ヨリ七月廿五日ニ至ル間ノ状況

第一節 六月二十六日ノ前進及劍山老坐山ノ占領

第二節 七月三日ヨリ五日ニ亘ル敵ノ劍山回復攻撃

第三節 七月六日以後二十五日ニ至ルマデノ状況

第三章 七月廿六ヨリ二十八日ニ至ル大白山攻撃

第四章 七月三十日ノ前進

第五章 大小孤山ノ攻撃

第三編 旅順要塞戦闘

第一章 攻撃準備

第二章 旅順要塞第一回総攻撃

第三章 八月二十五ヨリ十月二十五日ニ至ル状況

第一節 八月二十八日ヨリ九月十八日ニ至ル状況

第二節 九月十九、二十日第一、第九師団ノ攻撃援助

第三節 九月二十一日ヨリ第二回総攻撃ニ至ル間ノ状況

第四章 旅順要塞第二回総攻撃

第一節 攻撃準備

第二節 攻撃実施

第五章 第二回総攻撃終了ヨリ第三回総攻撃開始迄ノ状況

第六章 旅順要塞第三回総攻撃

第一節 攻撃開始前ノ状況

第二節 攻撃実施

第七章 第三回総攻撃以後十二月十七日ニ至ル状況

第八章 東鷄冠山北砲台ノ攻撃

第九章 十二月二十ヨリ三十一日ニ至ル状況

第十章 明治三十八年一月一日ヨリ旅順開城ニ至ル状況

第十一章 旅順開城及其ノ後ノ状況

第四編 給養及衛生

第一章 給養

第一節 上陸後ヨリ大弧山攻撃ニ至ル間ノ給養

第二節 旅順要塞本防禦線攻撃間ノ給養

第二章 衛生

第一節 人ノ衛生

第二節 馬ノ衛生

附録

第一 旅順戦闘歴

第二 旅順戦闘ニ於ケル戦死将校略歴

第三 旅順戦闘ニ於テ戦死シタル下士兵卒連名簿

附表

第一 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間死傷者一覽表

第二 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル人(退)院患者一覽表

第三 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間斃馬一覽表

第四 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間人馬補充一覽表

第五 出征ヨリ旅順要塞開城ニ至ル間彈藥消費一覽表

附図

第一 金州半島一般図

第二 七月五日以後第十一師団配備略図

第四 七月二十七日第三軍攻撃展開図

第五 八月八日第十一師団及攻城砲兵ノ一部攻撃展開略図

第六 第二回総攻撃前後ニ於ケル攻路進捗略図

第七 第二回総攻撃配置略図

明治三十七、八年戦役ニ於ケル野戦砲兵第十一連隊ノ戦歴

旅順要塞攻圍戦ノ巻

引用図書

一 野戦砲兵第十一連隊陣中日誌

一 全戦闘詳報

一 全第一、第二大隊戦闘略歴

一 全第一乃至第六中隊戦闘略歴

一 旅順方面ニ於ケル第三軍戦闘詳報第一乃至第十号

一 旅順方面ニ於ケル第十一師団戦闘詳報悉皆

一 露軍ノ行動第九卷

一 肉弾

明治三十七、八年戦役ニ於ケル野戦砲兵第十一連隊ノ戦歴

旅順要塞攻圍戦ノ巻

宣戦ノ詔勅

天佑ヲ保有シ、萬世一系ノ皇祚ヲ踐ル大日本国皇帝ハ、忠実勇武ナル汝有衆ニ示ス、

朕茲ニ露国ニ対シテ戦ヲ宣ス、

朕ガ陸海軍ハ、宣ク全力ヲ極メテ、露国ト交戦ノ事ニ従フベク、朕ガ百僚有司ハ、宣ク各其職務ニ率ヒ、其ノ権能ニ応ジテ国家ノ目的ヲ達スルニ努力スベシ、凡ソ国際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ尽シ、違算ナカランコトヲ期セヨ、惟フニ文明ヲ平和ニ求め、列国ト友誼ヲ篤クシ、次テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ、各国ノ権理利益ヲ損傷セズシテ、永ク帝国ノ安全ヲ将来ニ保証スベキ事態ヲ確立スルハ、朕夙ニ以テ国交ノ要義トナシ、日暮敢テ違ハサランコトヲ期ス、

朕ガ有司モ亦能ク朕ガ意ヲ体シテ事ニ従ヒ、列国トノ關係年ヲ逐フテ益々深厚ニ赴クヲ見ル、今不幸ニシテ露国ト鬪端ヲ開クニ至ル、豈朕ガ志ナラムヤ、帝国ノ重ヲ韓国ニ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ズ、是レ兩國系世ノ關係ニ因ルノミナラズ、韓国ノ存亡ハ実ニ帝国安危ノ繫ル所タレバナリ、然ルニ露国ハ其清国トノ盟約及列国ニ対スル累次ノ宣言ニ拘ハラズ、依然滿州ニ占拠シ、益々其地歩ヲ鞏固ニシテ、終ニ之ヲ併合セントス、若シ滿州ニシテ露国ノ領有ニ歸セ

ム乎、韓国ノ保全支持スルニ由ナク、極東ノ平和亦素ヨリ望ムベカラズ、故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ、切ニ妥協ニ因テ時局ヲ解決シ、以テ平和ヲ恒久ニ維持センコトヲ期シ、有司ヲシテ露国ニ提議シ、半歳ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ、露国ハ一モ交譲ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘズ、曠日弥久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ、陽ニ平和ヲ唱導シ、陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ、以テ我ヲ屈從センメントス、凡ソ露国ガ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノモ認ムルニ由ナシ、露国ハ既ニ帝国ノ提議ヲ容レズ、韓国ノ安全方ニ危急ニ瀕シ、帝国ノ国利ハ將ニ侵迫セラレントス、事既ニ茲ニ至ル、帝国ガ平和ノ交渉ニヨリ求メントシタル將來ノ保証ハ、今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ、朕ハ汝有衆ノ忠実勇武ナルニ倚頼シ、速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ、以テ帝国ノ光榮ヲ保全センコトヲ期ス、

明治三十七年二月十日

第一章 動員実施ノ状況

日露ノ国交既ニ断絶シ、我海軍八仁川ニ旅順ニ敵ノ艦隊ヲ撃沈シ、我第一軍ハ先ニ朝鮮東南岸ニ上陸シテ、逐次敵ヲ鴨綠江ノ右岸ニ圧迫シ、第二軍亦既ニ出征シテ、世界ノ耳目悉ク東亞ノ天地ニ集注シ、風雨暗瞻トシテ転々急ナルノ時ニ方リ、我方第十一師団ノ將卒ハ、鶴首シテ動員下令ノ緩慢ナルヲ嘆息シ、志氣徒ニ興奮シテ又抑ヘ難キ、頃ハ四月十九日、突如トシテ左ノ福音ニ接ス、

『明治三十七年四月十九日、第十一師団、第一、第十三、第十四、動員ヲ命セラレ、動員第一日ハ四月二十日トス、』

茲ニ於テ力將士踴躍嬉色満面ニ溢レ、意気既ニ敵国ヲ呑ム、是レ實ニ我軍ノ精華ニシテ、勝敗ノ数既ニ定マル、好戦国民トシテ諸外国ノ畏怖スル、亦故ナキニ非ズ、

即日將校准士官ニ管内詰切ヲ命ジ、動員実施ノ準備ニ着手ス、或ハ馬匹徵発ノ任務ヲ以テ地方ニ出張スルアリ、或ハ沿岸監視ノ任務ノ下ニ海岸ノ要所ニ出張スルアリ、其ノ他充足人馬ノ受領分配、新馬ノ装蹄調教、兵器被服ノ受授整頓等、各人各個人ノ任務非常ニ煩多ナリト雖、平素ノ計画周到ニシテ、各部ノ連繫

亦円満ナリシガタメ、動員十日ノ間着々進捗シテ、二十九日予定ノ如ク動員完結スルニ至レリ、又在郷中ノ軍人モ兼テ期シタルコトナレバ、多クハ期ニ先チテ来営シ、絶テ遅刻不参ノモノモナク、其気力体力又敢テ現役ニ譲ラズ、独徴發馬匹ニ至リテハ其性悍猛、馬格又劣等ニシテ、是レガ装蹄調教ニ意外ノ困難ヲ感ジタリ、然レドモ受領ノ当日ヨリ手段ヲ尽シテ之ガ調教ニ従事シタルヲ以テ、出征ノ当時二八一先ヅ其ノ任務ニ絶え得ルニ至レリ、實ニ我ガ砲兵ハ、戦時馬匹ノ大部ヲ徴發馬ニ求ムルノ結果、其ノ運動性ハ遺憾ナガラ多少減殺セラレ、ヲ免レズ、是レ軍国ノ大ニ憂慮スベキ所ニシテ、馬匹改良ノ声天下ニ喧轟タル、素ヨリ当然ノ事ナリトス、

此ノ如クシテ我連隊最初ノ動員ハ完結セリ、今左ニ上級幹部ノ氏名及ビ其ノ後ノ略歴ヲ列記シ、以テ後世ニ伝ヘン、

職名	官等	氏名	摘要
第十一師団長	中将	土屋光春	大將ニ進ミ後備役
参謀長	歩兵大佐	石田正珍	少將ニ進ミ退役
歩兵第十一旅団長	少將	山中信義	中将ニ進ミ第十六師団長
歩兵第二十二旅団長	少將	神尾光臣	中将ニ進ミ第九師団長
連隊長	大佐	足立愛蔵	少將ニ進ミ澎湖島要塞司令官
連隊副官	中尉	溝口直亮	少佐ニ進ミ独逸国駐在中
主計	三等主計	小池徳久	一等主計

全	小隊長	第二中隊長	中隊段列長	全	全	小隊長	第一中隊長	副官	第一大隊長	全	獣医	全	軍医
全	中尉	大尉	特務曹長	全	少尉	中尉	大尉	少尉	少佐	予 三等獣医	二等獣医	二等軍医	一等軍医
久熊重	平原長志	桑田安三郎	三王榮松	木村與一	景浦信敬	松本真穂	牧信愛	大屋敷正平	森本瀧一	六久保喜久間	阿部政章	清水英治	本多勝久
大尉二進三兵器本廠附	大尉二進三連隊副官	少佐二進三砲工学校教官	中尉二進三第三中隊附	中尉二進三山砲兵第二大隊副官	大尉二進三連隊附	大尉二進三撫順二テ戦死	旅順二テ戦死	大尉二進三大阪砲兵工廠々員	中佐二進三病死	二等獣医二進三予備	一等獣医、重砲兵第一連隊附	一等軍医、第二十二連隊附	現時ノ状況明力ナラス(病死)

中隊段列長	全	全	小隊長	第四中隊長	副官	第二大隊長	中隊段列長	全	全	小隊長	第三中隊長	中隊段列長	全
特務曹長	全	全	少尉	大尉	中尉	少佐	特務曹長	全	少尉	予 中尉	大尉	特務曹長	少尉
仙波富蔵	岡崎通	向井傳次郎	酒井昌一	坂田達	林正富	伊藤弦	喜多島懋	宇都宮敬行	松本修助	吉本正記	野本弥三郎	豊島恕	吉原量
中尉二進三予備役	中尉二進三第六中隊長代理	大尉二進三東京砲兵工廠々員	大尉二進三兵器本廠附	少佐二進三予備役	大白山二テ戦死シ大尉二進三	大佐二進三野砲兵第十連隊長	少佐二進三予備役	中尉二進三野砲兵第二十二連隊附	大尉二進三山砲兵第三大隊中隊長	大尉二進三予備	少佐二進三野砲兵第二連隊長	少尉二進三奉天会戦二テ戦死	中尉二進三第二中隊附

全	全	小隊長	連隊段列長	中隊段列長	全	全	小隊長	第六中隊長	中隊段列長	全	全	小隊長	第五中隊長
見習軍医	予 少尉	予 少尉	中尉	特務曹長	少尉	少尉	中尉	大尉	特務曹長	全	少尉	中尉	大尉
大森政市	矢島好善	秦克己	小林隆一	白本直次郎	大内収多	高石榮吉	小川伊太郎	森俊蔵	富田龍 <small>(若力)</small>	塩崎瀨三郎	津曲壯五	岡島詳吉	佐川金太郎
中尉二進三野砲兵二十二連隊附	中尉二進三大隊副官	中尉二進三予備役	大尉二進三連隊附	中尉二進三野砲兵第五連隊附	中尉二進三連隊附	大白山二テ戦死シ中尉二進ム	大尉二進三山砲兵第二大隊附	少佐二進三野砲兵第十連隊大隊長	中尉二進三野砲兵第二十二連隊附	中尉二進三第十一師団副官	大尉二進三第四中隊長	大尉二進三兵器本廠々員	少佐二進三予備役

全	全	縦列長	副官	彈藥大隊長	全	補充大隊附	第二中隊長	第一中隊長	副官	補充大隊長	右ノ外彈藥大隊補充隊ニ転出シタル現役將校左ノ如シ	獣医	軍医
中尉	休 中尉	休 大尉	中尉	大尉	少尉	全	中尉	全	中尉	少佐		予 二等獣医	予 三等軍医
村岡熊太郎	杉内卓	寺川倉次郎	野中林一	鳥川重雄	岡田保平	石垣唯一	栗並道次郎	服部舜平	勝田久貴	酒寄由三郎		大山宇吉	安藤寅之進
全	大尉二進三予備役	予備役	大尉二進三中隊長	少佐二進三予備役	中尉二進三連隊附	大尉二進三連隊附	大尉二進三野砲兵十二連隊中隊長	大尉二進三大阪砲兵工廠々員	大尉二進三野砲兵二十二連隊附	中佐二進三予備役		旅順ニ於テ病死	二等軍医二進三予備役

全	全	阿部長一郎	大尉二進三第五中隊長
---	---	-------	------------

僅々七年ノ間人事ノ変動何ゾ斯クノ如ク劇甚ナルヤ

第二章 待命間ノ状況

四月廿九日我連隊ハ、出師準備全ク完結シ、准士官以上ノ管内詰切ヲ解キ、専心出征ノ命ヲ希待スルノ状況トナレリ、当時補充隊二編入セラレタル下士卒ニシテ、泣テ出征ヲ希望スルモノアリ、又以テ士氣興奮ノ状況ヲ察知スルニ足ラン、動員完結後ハ、専ラ人馬ノ訓練ニ任ジ、殊ニ射撃術及徵発馬ノ調教並ニ行軍力ノ錬成ニ努力セリ、是レタメ各中隊ハ教育日課ヲ定メ、各職務ニ応ズル如ク分業的教育ノ実施ニ努メ、又大隊毎ニ雲辺寺原ニ出張シテ、実弾射撃ヲ演練シ、且毎週約二回行軍ヲ施行シテ、行軍力ノ錬成ヲ謀リ、其用役ニ堪ヘザルモノハ、適次補充隊ト交換シテ、戦闘力ノ増進ニ努メタリ、就中最モ困難ヲ感シタルハ、徵発馬ノ調教ニシテ、往々負重ニ絶ヘズシテ昏倒シ、或ハ咬蹴シテ、人馬ニ傷害ヲ及ボスモノアリ、從ツテ之ヲ乗馭スル馭者、殊ニ身幹倭小ナル砲兵輪卒ノ若心ヤ察スルニ余アリキ、

待命間前後三回外出ヲ許下セリ、又面会人多クシテ、タメニ教育ノ進捗ニ妨害ヲ来タスコト尠ナカラサリシヲ以テ、予メ面会日ヲ定メ、平常ノ面会ハ、特別ノ理由ナキ限り之ヲ謝絶セリ、尚補充隊ハ、市街ニ宿営シ、風紀ノ維持頗ル困難ナリシヲ以テ、花柳病ノ発生ヲ予防スルタメ嚴重ナル訓戒ヲ加ヘ、一旦花柳病ニ罹リシモノハ、断ジテ出征セシメズ、且ツ戦後ノ恩賞モ一級褫減スベキ旨宣告シ、以テ其ノ発生ヲ未然ニ防止スルヲ努メタリ、当時世評ハ最大トナリ、日露戦役ノ消息ニ傾注シ、未タ出征セズシテ既ニ戦場ノ人タルガ如シ、殊ニ国民ノ声援奨励ノ辞ハ、快ク吾人ノ脳裏ニ侵徹シ、得意満面愉快極マリナシ、此ノ如クシテ將士生還ヲ期セズ、唯一心ニ自己ノ本分ニ向ヒ、勇往邁進トシテ尙已マザラントシ、真ニ意氣衝尺ノ慨アリキ、正ニ是レ軍人得意ノ絶頂ニシテ、強露ノ鋒尖挫ケザラント欲スルモ能ハザルナリ、

動員全ク完結スルヤ、四月三十日ヲ以テ連隊ノ武装検査ヲ行ヒ、同時ニ中隊毎ニ撮影シテ出征ノ紀念トス、超ヘテ五月六日師団長ノ觀兵分列式アリ、威風堂々嗜者群ヲナシ士氣益々振フ、式後偕行社ニ於テ官民連合ノ留送別会アリ、五月二日通牒ヲ以テ我第一軍力九連城ヲ陥レ、敵ヲ壊乱セシメタル情報ニ接シ、万歳ノ各所ニ湧ク、五月七日紀念ノタメ將校一同其ノ家族ト共ニ撮影ス、現ニ將校集会所ニ揭示スル所ノモノ即之ナリ、五月十八日連隊全部金比羅宮ニ参拜シ、軍国ノタメ武運ノ長久ヲ祈ル、

第三章 船舶輸送

待命ノ期意外ニ長クシテ、將士踴躍ノ情益々加ハリ、一日モ速カニ出征シテ、敵ニ見ヘントスルノ情切ナリ、此の時ニ當リ、五月十九日附ヲ以テ、船舶輸送ニ関スル命令ヲ受領シ、連隊ハ左ノ如キ区分ヲ以テ、他兵種ト共ニ逐次乗船スルコトトナレリ、

乗船月日	部隊号	船名	噸数	同船部隊号
五月二十一日	第一大隊本部及第一中隊	讚岐丸	六、一〇七	歩兵第十二連隊本部及九個中隊
全	第二中隊	丹波丸	六、二一九	師団及歩兵第二十二旅団司令部並ニ歩二二ノ三中隊
五月二十二日	連隊本部及第三、第四中隊	土佐丸	五、八二三	歩兵第四十三連隊ノ二ヶ中隊
全	第二大隊本部及第五中隊	八幡丸		歩兵四十三連隊(三中隊欠)
全	第六中隊	ろひら丸		騎兵連隊
全	連隊段列	吉林丸	四、〇〇〇	歩兵一中隊

乗船開始ノ關係上、屯営出發八何レモ夜半ニシテ、人馬肅々道ヲ中村島坂道ニ取り、詫間ニ向ヒ前進ス、當時町村ノ人民八、老若男女ヲ問ハズ、或ハ街道ニ、或ハ乾田中ニ整列シ、到ル所炬天ヲ焦シ、萬歳ノ声萬嶺ヲ破リ、其ノ反響如何ニモ悲愴、何レモ衷心、吾人ノ武運ヲ祈ラザルナシ、殊ニ島坂以東ノ地ハ、隨所ニ西讃遠近ノ小学生徒路傍ニ整列シテ、嬋手ニ国旗ヲ把持シ、可憐ノ声音ヲ振り絞リツツ、征露ノ歌ヲ合唱シ、其ノ調快絶、熱情真ニ声外ニ溢ル、是ヲ聴クモノ誰カ心躍リ、氣興奮セサルモノアラシ、サレバ流石武骨ノ將卒モ思ハズ落ス一滴ノ涙、人知レズ絞ル袖ノ裏、思ハ馳スル滿州ノ野、真ニ是レ無上ノ好饒別ナリキ、

偶々飛報アリ、我海軍ノ中監タリシ戦艦八島、初瀬ハ、旅順港口ニ於テ敵ノ水雷ニ罹リ沈没セリト、有為転変ハ世情ノ常態トハ云ヘ、如何ニ吾人ノ心傷ヲ攪乱セシメンゾ、

乗船ノ當日ハ、詫間湾頭巨船輻輳シ、四方ノ山々ニハ見送ノ群衆時ナラヌ花ヲ飾リ、歡呼ノ響、声援ノ辞、乗船動作ノ実施ト相俟テ其ノ光景真ニ快絶ナリキ、幸ニシテ天候静穏ナリシヲ以テ、乗船ノ動作ハ、意外ニ進捗シ、殊ニ將卒ノ一半ハ、客年大演習ノ際親シク乗船動作ニ從事シタル実験アリシヲ以テ、何レモ予定ノ時間ニ先チテ完結ヲ告ゲ、今ヤ住馴レシ四国ノ山河ヲ跡ニ眺メ、萬感交々胸裏ニ往来シツトモ、汽笛一声を名残トシ、極メテ愉快ノ船出ヲナシ得ルニ至レリ、瀬戸内海ノ航海ハ、何時シカスミテ門司馬関、之レガ一生ノ見納メト思フ残スコトモナク、海軍將校指導ノ下ニ我行先ハ、白雲ノ風ノマニク漂ヒツト、音ニ名高キ玄海モ何時シカ過ギテ対馬沖、通フ千鳥ノ非ザレバ、文コトツクル術モナク、今ヤ興亡定メナキ朝鮮國ヲ右ニ見テ、進メバ黄色ナル黄海超ヘテ鴨綠江、コトハ我等ニ先チテ第一軍ガ若戦ノ地、尚モ進メバ島々ヲ集メテ名付ケシ長山列島、海ト陸トノ差ハアレドモ、共ニ忠義ヲ尽スベキ我艦隊ノ根拠地ハ、廣鹿島ノ島影、大小艦艇堂々ト常ニ出動ノ姿勢ニテ遠ク眺ムル、旅順ノ沖ヲ絶ヘズ警戒怠ラス、師団ノタメニ上陸ノ動作掩護ニ任ジツツ、威風凛々従容ト迫ラズ見ユル頼シサ、尚モ進メバ張家屯塩ト俗ニ云フ、港ト云フハ名ノミニテ、海ハ遠浅波荒ク、上陸ノ動作ノ困難ハ、今ヨリ思ヒ知ラレタリ、サレ

ド第二軍ノ主力タル第一、第三、第四、第五ノ四師団ハ、既ニ此処ヨリ上陸シ、今日力明日カハ知ラネドモ、音ニ名高キ金洲ノ南ニ聳ユル南山ヲ攻メンガタメニ進ムラン、早ク揚リテ滿州ノ風土ニ接シ、且ハ又敵ノ面影拜マント逸リシ甲斐モアラズシテ、既ニ日暮トナリケレバ急ギテ帰ル、島影ニ今宵限りノ船宿リ、夢ハ旅順ニ通フラム、

二十四日先着セル丹波丸ハ、二十五日朝来僅ニ其ノ一部ヲ上陸セシメタルモ、風伯其ノ暴威ヲ逞フシテ激浪努濤、恰モ巨山ノ崩ルトガ如ク、到底揚陸作業ヲ継続スルヲ得ズ、又二十六日八昨日ニ勝ル暴風ニテ、空シク仮根拠地ニ仮泊スルノ已ムナキニ至レリ、超ヘテ二十七日ニ至レバ海波少シク凪ギ、端舟ノ漕航ニ危険ナキニ至リシヲ以テ、丹波丸ノ残余、栄城丸及ビ土佐丸ハ、逐次其ノ揚陸ヲ開始シテ、第一大隊(第三中隊欠)ハ、其ノ全部ヲ陸揚セシムルヲ得タリ、張家屯ハ、其ノ始メ海岸ノ設備稍々完全ナリシモ、連日ノ暴風ニ其ノ棧橋ハ破壊セラレ、端舟ハ覆没シテ、揚陸材料頓ニ其ノ数ヲ減ジタレハ、其ノ作業ノ困難尋常ニ非ズ、サレハ稀ニ海中ニ波溺セル軍馬アリ、或ハ激浪ニ翻弄セラレ、將ニ魚腹ニ葬ラムトスル士卒アリ、其ノ慘膽タル光景真ニ憐ムベキモノナリ、剩ヘ水浅クシテ船進マズ、已ムナク脛ヲ没シテ徒渉スルモノ多カリキ、サレド我連隊ハ、僅ニ馬数頭ノ犠牲ヲ海神ニ供シ、漸ク此ノ難關ヲ脱スルヲ得タリ、予ハ當時丹波丸ニアリ、二十五日上陸シテ二日間天幕ノ裡ニアリ、時ニ西方遙ニ遠雷ノ轟々タルヲ聞ク、是レ將ニ我第二軍ガ南山ヲ攻撃中ナル砲声ニアラン、幾モナク諸種ノ風説ハ下士卒ノ間ニ宣伝セラレ、吾人ノ神經ヲ刺戟セリ、曰ク我第二軍ハ、敵ノ逆襲ヲ受ケテ約二里ノ後方ニ退却セリト、或ハ曰ク砲兵某連隊ノ如キハ、將士殆ンド全滅セリト、或ハ曰ク我方第二軍ハ、砲弾全ク尽キテ攻撃ヲ中止セリト、又海軍ノ方面ニ就テハ、我上村艦長ノ旗艦波没セリト、或ハ曰ク我運送船対馬沖ニ於テ浦塩艦隊ノタメニ撃波セラレシト、諸説紛々徒ニ士卒腦裏ヲ惑乱セシメ、而モ一トシテ凶報ナラザルトナシ、幸ニシテ後幾何モナク我陸軍八南山ニ勝テ、海軍ノ不幸ハ全ク風説ニ過ギザリシヲ確メ得テ、漸ク安堵ノ胸ヲ撫スルヲ得タリ、

第四章 上陸後ノ行軍

二十七日第一着二上陸シタル第二中隊八、師団ノ命令ニ基キ逐次金洲ニ向ツテ前進スルニ決シ、先大関家溝ニ向ヒ前進シ、午後三時茲ニ到着宿営ス、第一大隊本部及ビ第一中隊八、廿七日一先ツ上陸地ニ幕営シテ、二十八日第二中隊ニ追及ス、

大関家溝八、戸数僅に十数軒、民貧フシテ家狭ク、臭気紛々トシテ吐氣ヲ催シ、到底民家ヲ利用スルノ余地ナカリケレバ、皆其ノ附近ニ幕営シ、馬八揚柳ノ影ニ繫キツツ、純然タル天幕露営ヲナセリ、サレド其ノ後日ヲ経ルニ從ヒ、天幕内ノ窮屈ナルト屢々風雨ニ悩マサレシ結果、臭シト思ヒシ支那家屋モ、漸次將士ノ歡迎スル処トナリ、遂ニ八争フテ民家ニ起臥スルニ至レリ、

第一大隊(第三中隊欠)八、茲ニ一日滞在シ、翌二十九日関家店ニ向ヒ前進シ、午後三時到着、茲ニ宿営ス、行程約七里、途中負傷者ノ上陸地に護送セラル、ニ合フ、又宿営地附近八、数日前ノ戦場ニシテ、半死ノ軍馬尚伸吟シテ救ヲ求ムルヲ見ル、

連隊本部及第三、第四中隊八、二十九日午前九時上陸ヲ了リ、午食後上陸地出發、賈家屯ニ向ヒ前進シ、午後五時到着、茲ニ宿営ス、又第五中隊八、同日正午上陸ヲ終リ直ニ発足、午後十時賈家屯ニ着シ連隊ニ合ス、第六中隊及ビ連隊段列八、尚揚陸ヲ終ラズ、

三十日午前八時第一大隊(第三中隊欠)八、関家店出發、金洲ニ向ヒ前進シ、午前十一時七里庄ニ到着シ、茲ニ宿営ス、行程約三里、連隊本部及第三中隊並ニ第二大隊(第六中隊欠)八、午前八時賈家屯出發、関家屯ニ向ヒ前進シ、午後五時到着、約五時間ノ大休止ヲ行ヒ午後十時再出發、七里庄ニ向ヒ夜行軍ヲ実施シ、午前二時到着、大一大隊ニ逐及ス、行程約十二里、人馬ノ疲労甚ダシ、

第六中隊及連隊段列八、当日上陸地出發、強行軍ヲ以テ連隊ノ進路ヲ続行ス、予八当時金洲ニ先着セル故ヲ以テ、各將校ト共ニ南山ニ登リ、親シク其ノ戦跡ヲ視察スルノ機會ヲ得タリ、(柳モ)南山八、金洲地狭ノ南側ニ連亘セル丘阜ニシテ、其標高高カラズト雖モ、眼下ニ金洲城ヲ瞰下シ、眼界ノ達スル所約四、五

千米ノ間遮蔽ニ適スル地物ナク、両側八齊シク海洋ニ接シ、其ノ幅約一里半、專守的防禦陣^(脱)シテ八塞ニ天然ノ形勝ヲ占ム、唯憾ムラクハ其位置扇子ノ要ニ類シ、其ノ前地ニ於テ敵ニ放囲セラル、ノ形ヲナスト雖モ、側面ハ絶対堅固、海ニ接スルヲ以テ、其ノ攻撃ハ唯正面ニ向ヒ一意突進スルノ外ナシ、加フルニ露軍八、此ノ地ヲ旅順要塞ノ前進陣地トシテ堅固ニ防禦設備ヲ完成シ、百門近き大砲八、其頂界綿ニ配列セラレ、数條ノ鉄線八、二重三重ニ鉢巻形ノ散兵壕前ニ纏絡セラレ、死角ト思ハシキ所ニハ、機關銃ヲ以テ側防ノ設備ヲナシ、其配備真ニ周然スル所ナキ、半永久的築城ナリ、宜ナリ、我第二軍方三箇師団ノ精兵ト砲兵旅団ヲ展開シテ、十数時間ニ亘リ攻撃スルモ、尚容易ニ奏効セザリシコトヤ、其損害ノ四千ヲ超ヘ、我砲彈ノ將ニ尽キントセン、素ヨリ当然ノコトナリトス、幸ニシテ我艦隊ノ金洲灣ヨリ敵陣地ヲ有効ニ側射スルアリ、奥軍司令官確呼タル決心ト、士卒ノ勇敢ナル突撃トハ、遂ニヨク攻撃奏効ノ実ヲ揚ケ、敵ヲ旅順方面ニ撃退シ、将来ノ作戰上最モ重要ナル大連ヲ我掌中ニ収ムルヲ得タリ、而モ我師団八、始ヨリ第二軍司令官ノ隸下ニ在リナガラ、遂ニ此ノ戦闘ニ参加スルノ機會ヲ逸シ、空シク其ノ戦場ヲ弔フニ過ギサリシハ、吾人ノ深く遺憾トセシ所ナリ、

三十一日午前二時連隊八、第六中隊及ビ連隊段列ヲ除クノ外、悉ク七里庄ニ集中シ、第一大隊(第三中隊欠)八、午前四時出發、師団ノ先進部隊ト共ニ臭水屯ニ向ヒ前進シ、連隊本部及第三中隊並ニ第二大隊(第六中隊欠)八、午前九時出發、之ニ跟隨ス、此ノ日金洲城外出發ニ先チ、第二軍ノ南山攻撃奏効ニ関シ、勅語ヲ伝達セラル、聞クモノ万感胸ニ迫ラザルナシ、

当日ノ行軍八、行程約七里ニ過ギズト雖モ、氣候既ニ炎熱ヲ感シ、剩ヘ微風塵埃ヲ飛揚シテ眼前咫尺ヲ辨セズ、人馬共ニ濃塵ヲ浴ビテ百鬼夜行ノ奇觀ヲ呈ス、サレバ平素脚力ノ強健師団ニ冠タリシ高知連隊スラ路傍ニ墜落伍者踵ヲ接シ、其状真ニ憊然タルモアリキ、幸ニシテ我連隊八、極メテ少数ノ落伍者ヲ除クノ外、極メテ健全ナル状態ヲ以テ、第一大隊(第三中隊八夕頃追及ス)^(八九分)午後四時頃沙河口ニ、連隊ノ主力八、午後六時頃刘家屯及尚家屯ニ到着シ、茲ニ宿営シ、又二十九日上陸次來連隊ニ追及中ナリシ第六中隊及ビ連隊段列八、平時前

例ナキ強行軍ヲ以テ、六月一日午後一時連隊ノ宿营地ニ到着シ、茲ニ初メテ連隊全部ノ集中ヲ終レリ、

此ノ行軍ニ於テ人員ノ損害ハ殆ンド皆無ニシテ、志気旺盛ナリシト雖、体力虚弱ナル徵発馬ハ、往々途中ニ於テ昏倒シ、上陸以後旬日ナラスシテ十数頭ノ斃馬ヲ生スルニ至レリ、

吾人ノ宿営シタル沙河口ノ地タル、大連ヲ西ニ去ル一里強ノ一寒村ニ過ギザリシガ、今ヤ南滿州鉄道会社ノ経営ニヨリ、全ク其ノ面目ヲ改メテ、往時ノ原野ハ化シテ四通八達ノ市街トナリ、電車又大連トノ間ニ交通シテ、其ノ実況到底昔日ト曰フ全フシテ談ズル熊ハズ、大連又當時兵燹ニ罹リ、余燭尚止マズシテ、其ノ状寧ク悽然タルモアリシガ、今日ノ大連ハ東洋屈指ノ大都トナリ、其ノ施設ノ文明的ニシテ雄大ナル、本邦多ク其ノ比ヲ見ズ、吾人ハ今昔ヲ比較シテ其ノ變遷ノ速力ナルニ驚カザルヲ得ザルナリ、

第二編 旅順要塞前地ノ諸戦闘

第一章 南沙河口附近ニ於ケル攻圍線ノ編成

南山ニ破レタル敵ハ統テ退却シ、我第二軍ハ一時其接觸ヲ失ヒシモ、諸情報ヲ綜合シテ、岔溝及黄泥川、大上屯附近ニ若干ノ敵兵アルヲ知り、之ニ備フルガタメ、第一師団ヲ以テ金洲灣方面ヲ、第三師団ヲ以テ大連灣方面ヲ守備セシメガ、遼陽方面ノ敵兵漸次南下ノ徵アルヲ知り、先普蘭店附近ヲ占領シテ軍ノ背後ヲ掩護セシ騎兵旅団及ビ第五師団ヲ増援スルノ必要ヲ感ジ、第二軍ハ其ノ主力ヲ以テ成ルベク速力ニ北進スルニ決シ、即日其ノ運動ヲ開始セリ、茲ニ於テ我第十一師団八第三師団ト交代シ、第一師団長貞愛親王ノ指揮下ニ在リテ旅順攻圍ノ任務ニ服シ、次テ第三軍ノ戦鬪序列ニ入り、有史以來ノ大活劇ヲ演ズベキ序幕ヲ開クニ至レリ、是レガタメ受領シタル師団命令ノ要旨左ノ如シ、

第十一師団命令 五月三十一日午後三時四十分

於沙河口北方高地東麓

軍隊区分

一一、敵ノ乘馬兵約十名八、南沙河口ノ西南約三里ナル

右翼隊

長歩兵第十師団長

山中少將

歩兵第二十二連隊

騎兵第二中隊

機関砲二中隊

工兵第二中隊

左翼隊

長歩兵第二十二旅団長

神尾少將

歩兵第十二連隊(一中隊欠)

歩兵四十三連隊二大隊

騎兵第三中隊

砲兵第一大隊

機関砲二小隊

工兵第三中隊

ダルト一隊

歩兵四十四連隊第二大

隊(二中隊欠)

騎兵半小隊

工兵第一中隊

予備隊

歩兵四十四連隊(第二大隊本部及二中隊欠)

歩兵第四十三連隊(第二大隊ト一中隊欠)

騎兵第十一連隊本部及

騎兵第十一連隊本部及

騎兵第十一連隊本部及

騎兵第十一連隊本部及

黄泥川、大上屯ニ、又毛頭子峠ノ西南約二里ナル岔溝ニモ若干ノ乘馬兵アルモノノ如シ、

第一師団八、安子山ヨリ毛頭子峠ノ南方標高213ノ高地間ヲ占領セリ

二、師団八、今ヨリ第三師団ト交代シ、第一師団ノ左翼ヨリ台子山ニ巨ル間ヲ旅順方向ニ対シ占領セントス、

三、右翼隊八、第一師団ノ左翼ヨリ座山溝北方標高324ノ高地ニ巨ル間ヲ占領スベシ、

堅固ナル工事ヲ施スベシ、

四、左翼隊八、頭道水溝 凌水河子道ヨリ台子山ニ巨ル間ヲ占領シ、右翼隊ト連絡スベシ、

堅固ナル工事ヲ施スベシ、

五、ダルト二大隊八、西ダルト一ヲ占領シ、諸危険物ヲ排除シ、諸建築物及諸材料ヲ保護スベシ

六、予備隊八、左ノ如ク村落露営ヲナスベシ、

歩兵第四十四連隊 馬蘭溝

(第二大隊本部及二中隊欠) 周家屯

師団司令部

歩兵第四十三連隊

(一大隊ト一中隊欠) 北沙河口

工兵大隊本部

北沙河口露営指令官八、歩兵第四十三連隊長トス、

騎兵第十一連隊本部及ビ第一中隊 香爐礁

(半小隊欠) 尚家屯

砲兵十一連隊 刘家屯

(一大隊欠)

七、大行季ノ糧秣ヲ使用スベシ、補充八追テ達ス、

第一中隊(半小隊欠) 八、予八、北沙河河口師団司令部ニアリ、午後十時命令砲兵十一連隊(一大隊 欠) 受領者ヲ出セ、

工兵第十一大隊本部

輜重

略ス

第十一師団長 土屋光春

此ノ命令ニ基キ、第一大隊長八中隊長ヲ伴ヒ、三十日夕頃陣地ヲ偵察シ、其間諸隊八幕営ノ準備ヲナセリ、此の夜天暗クシテ呎尺ヲ辨セズ、殊二第一大隊ノ露営地ハ、良水ナカリシヲ以テ、約千米ヲ隔テ炊事場ヲ設置シタルニ、食事受領ノタメ赴キタル兵卒中、幕営地ノ所在ヲ忘レ、諸所彷徨ノ末、遂ニ意外ノ岩影ニ独夜ヲ徹セシモノアリ、全夜又盛ニ降雨アリ、雨水漏洩シ、幕中残ル隈ナク一面ノ水トナリ、不快極マリナシ、

翌六月一日吾人八初メテ第一線ニ立テリ、即昨夜偵察シタル陣地ニ赴キ、砲手馭者全力ヲ挙ゲテ工事ニ従事ス、午前八時三十分俄然大雷雨アリ、偶々第一中隊陣地ニ落雷シ、景浦少尉(今大尉)、山下曹長(今中尉)外兵卒二名電撃ヲ受ケ、乗馬一頭傷死セリ、同日午後第一大隊八、陣地後方ノ谷地ニ幕営ヲ転ズ、此の時二当リ敗退シタル敵八、東狙兵第四師団ノ全部及第七師団ノ一部ヲ以テ、双台溝、安子峯、老坐山ノ線ヲ占領セリ、然レドモ六月十日ニ至ル迄ハ、敵ハ此の線ヲ以テ、要塞ノ前進陣地トシテ固守スルノ考案ナカリシモノノ如ク、即チ六月八日「ステッセル」中將ノ下セル命令中「敵兵攻撃ニ転ゼバ頑強ナル戦闘ヲ行ハズ、各部隊八鳳凰山ニ退キテ、予メ選定セル陣地ヲ占領スベシ」トノ辞アリシヲ以テ、之ヲ察スルヲ得ベシ、然ルニ爾後諸偵察ノ結果、日本軍ガ未ダ俄力ニ活発ナル攻撃ニ出ツルノ景況ナキヲ知り、六月十四日ヲ以テ、此ノ線ヲ固守スルノ決心ヲナセリ、而シテ其兵力ノ概数ヲアグレバ左ノ如シ、

歩兵十七大隊、獵兵十七隊、野砲六十門、山砲八門、五十七密砲六門、機関銃十二門
以上ノ指揮官八第四師団長「フォーク」少將ニシテ、其ノ配備八第一師団ノ方面ニ重点ヲ置ケリ、又此ノ決心ヲナスト同時ニ、鳳凰山ノ陣地構築ヲ断念セリ、

実ニ此ノ時機ニ於テ、敵ノ兵力其要塞内部ニ在ルモノヲ合スレバ、略我ニ倍スルガ故ニ、敵ニシテ若シ決然攻撃ニ転ゼバ、金洲地狭ノ回復敗テ不可能ナルニ非ズ、殊ニ南下セル敵、其ノ海軍ト策心シテ攻勢ニ転スルニ至ラバ、我力軍ノ運命蓋シ測知シ難キモノアリシナランニ、敵ハ此ノ拳ニ出ツルコトナク、不確實ナル決心ノ下ニ躊躇悛巡、遂ニ好機ヲ逸シタルハ、所謂我軍ノ天佑トモ称スベキモノカ、

六月二日左ノ通報ニ接ス、

金洲以北ノ敵八、漸次南下スルモノノ如ク、我騎兵旅団八、曲家店(普蘭店北方九里)ニテ五月三十日諸兵連合ノ敵ト衝突シ、之ヲ北方ニ撃退セリ、

六月六日左記要旨ノ命令ニ接ス

一、土人ノ言ニ依レバ、黄泥川、大上屯ノ西方高地ニハ、敵砲四門、歩兵千五百、騎兵五百アリト、

二、砲兵第二大隊ノ一中隊八、明日ヨリ右翼隊長ノ指揮下ニ属スベシ、

三、予備隊タル諸隊八、明日ヨリ左ノ如ク村落露営ヲナスベシ、

砲兵連隊本部及第二大隊(第六中隊欠)並連隊段列 三椿柳、候家溝

此ノ命令ニ基キ第六中隊ヲ右翼隊ニ配属ス、

本日ヨリタル^(M)ニ市場ヲ開設セラレ、副食物日用品等ノ買辦ヲ許サルタメニ、給養上利スル所多ク、初メテ生魚生菜ヲ食スルヲ得タリ、当時タルニハ兵焚余燼漸ク治マリ、市場稍々整頓シタルモ、空家多ク、殊ニ其港灣及諸建築物ハ、先ニ敵ノ破壊スル所トナリ、其ノ家宝財産ハ、貪欲飽クナキ土民草賊ノ掠奪ヲ蒙リ、其ノ光景転々凄然タルモノアリシモ、利ニ恰キ支那人ハ、逸早くモ既ニ商売ヲ開設シ、軍隊ヲ以テ唯一ノ得意トナシ、法外ノ利益ヲ貪リテ、其囊中ヲ肥シツヽアリ、然レドモ是ガタメ我軍隊ノ亨ケタメ便利モ亦少シニアラザリキ、

六月四日第六中隊八、右翼隊ニ属シ第一線ニ出デ、連隊本部及第二大隊(第六中隊欠)ハ、新宿営地ニ移レリ、其ノ宿営地タル民家疎散ニシテ宿営力乏シカリシヲ以テ、其ノ大部ハ天幕露営ヲナシ、其ノ一部ハ民家ニ舎営セリ、又此ノ方面ハ良水乏シク且樹蔭ナキヲ以テ、馬繫場ノ設置ニ困難セシモ、平卒八馬匹

ノ日々炎天ニ曝サルトヲ憊ミ、樹枝又ハ蓆ヲ以テ急造屋蓋ヲ構築シ、以テ其ノ苦惱ノ一端ヲ慰スルニ努メタリ、然レドモ將校以下平素スル作業ノ実験ナカリシヲ以テ、其ノ構築多クハ兇戯ニ類シ、比較的其ノ実効ヲ収メ得ザリシヲ遺憾トス、又天幕露営ノ演習モ出征前僅ニ二、三回実施シタルニ過ギザリシヲ以テ、其ノ設備ニ完成ナラズ、タメニ屢々雨水侵入シテ衛生上有害ナル感作ヲ受ケシコト尠シトセズ、然レドモ日ヲ重ネ経験ヲ積ムニ從ヒ、是等作業モ漸次巧妙トナリ、遂ニ野営生活ニ慣熟スルニ至レリ、

同日ヨリ冬衣夏袴ニ改メタリ、當時ノ夏衣ハ現時ノ服制ト肩章及袖章ヲ異ニスルノミニシテ、其ノ色茶褐色ナリシト雖、冬衣ハ黒絨ニシテ、其ノ製作多ハ狭小二失シ、冬季防寒被服ヲ装着スルニ伴ヒ、益々其ノ不便ナルヲ感ジタリ、又此ノ色彩ハ、滿州ノ土質風物ト全然其赴ヲ異ニスルヲ以テ、敵ノ目標トナリ易ク、其ノ不利少ナカラシヲ以テ、戦後直ニ現時ノ茶褐色制ヲ採用スルニ至レリ、當時氣候ハ漸次暖氣ヲ加ヘ、群蟻続生シテ夏蠅キコト限リナシ、之レガタメ日々宿营地ノ清潔法ヲ勵行シ、水ノ乱用ヲ禁ジ、以テ衛生状態ノ維持向上ヲ希圖シタリ、幸ニ出征後間モナキコトトテ、將士ノ健康状態ハ一般ニ良好ナリシモ、不自然ノ生活ニヨリ、日々其体力ノ消耗シツヽアルハ免レザル所ニシテ、病兵ノ漸次増加セントスルノ景況ヲ呈シ、出征後ニ過日ヲ出デザル今日ニ於テ、既ニ八名ノ入院患者ヲ出シ、在隊中ノ患者又十数名ノ多キニ對シタリ、馬匹ハ假令滞陣中ト雖、絶えず相当ノ運動調教ヲ課シ、以テ其ノ体力ヲ維持増進セサルベカラズ、之レガタメ毎日約二、三時間ノ教練ヲ実施シ、且ツ青草粟穀等ヲ与ヘテ其ノ營養ヲ佳良ナラシムルニ努メタリト雖モ、元來体力虚弱ナル徵発馬匹ハ、過日ノ強行軍ニ依リ、体力ノ衰耗其極度ニ達シ、出征後幾何モナキ今日ニ於テ、己ニ二十二頭ノ癩馬ヲ生ズルニ至レリ、

此ノ如キ状況ナルヲ以テ、人馬ノ衛生ニ就テハ、平素ノ教育ヲ周到ニシ、給養ノ完備ヲ圖リ、且成ルべく徒勞ヲ避ケテ、絶ヘズ之ヲ愛惜スルニ非ザレバ、到底健全ナル戦闘力ヲ保持スルコト難ク、補充ニ重アルニ補充ヲ以テスル時ハ、其素質漸次不良トナリ、長キ戦役ノ末後ニハ是等不良ノ人馬軍ノ大部ヲ占メ、所謂兵数アルモ兵力ナキニ至ルベシ、豈心セスシテ可ナランヤ、將士ノ携帯ス

ル軍刀ハ、其ノ光沢日光ニ反射シテ敵ニ所在ヲ発見セラルト虞レアルヲ以テ、各種ノ布片ヲ以テ其劍鞘ヲ巻纏スルコトトナレリ、又土民ノ露探ニ備フルタメ、宿营地ノ標札隊号等ハ、総て片假名ヲ以テ記載スルコトトナレリ、是レ皆將來ノ実戦ニ於テ注意スベキ要件ナリトス、

本日左ノ通報ニ接ス、
第十一師団ハ、第二軍司令官輿大將ノ指揮下ヲ離レ、第一師団ト共ニ第二軍ノ戦闘序列ニ入ル、軍指命令官ハ乃木中將(大將ニ進ム)軍參謀長、當時彈藥大隊八輜重大隊及野戰病院ト共ニ第一、第二梯隊ニ区分セラレ、第一歩兵彈藥縱列、第一、第二砲兵彈藥縱列ハ、第一梯隊トシテ三三三(三八)柳、刘家屯ヨリ北部三道溝ノ間ニ、残余ハ第二梯隊トシテ臭水屯ヨリ前南関嶺ノ間ニ二宿營セリ、
六月七日左翼隊ハ、警急集合ノ演習ヲ行ヒ、益々警備ヲ嚴ニス、
同日砲兵中尉小林隆一ハ大尉ニ、少尉昌一ハ中尉ニ昇進シタル旨通報ニ接ス(五月廿四日付)、

六月八日各宿营地毎ニ衛生委員ヲ命ジ、病疫ノ發生ヲ予防スルニ努メタリ、
六月九日左ノ訓示ヲ受ク、
不肖希典茲ニ軍司令官ノ重任ヲ忝クセシバ、寔ニ光栄トスル所ナリ、軍ノ任務ヲ達成スルハ、主トシテ諸子ノ忠勇ト協同動作トニ由ラザルベカラズ、諸子深ク此ノ意ヲ体シ、奮勵以テ其ノ事ニ從フベシ、

明治三十七年五月三十日 第三軍司令官陸軍中將 乃木希典

六月十日軍司令官第一線諸隊ヲ巡視セラル、
活動ノ時期近キタルト靴ノ保全ヲ良好ナラシムルタメ、各中隊ニ麻苧ヲ分配シ草鞋ヲ調製セシメタリ、
六月十一日次ノ通報ニ接ス、

一、ダルニ一支援隊ハ、自今軍司令官ノ直轄トナル、
二、昨朝浅田、丸井両少將ノ指揮スル第十師団ノ兩支援隊ハ、大ナル損害ヲ受ケスシテ岫巖ヲ占領セリ、

此の師団ハ、大孤山附近ニ集合シタルモノニシテ、爾後第四軍司令官野津大將ノ指揮下ニ入リ、第一、第二軍ノ中間ニ在リテ動作シタルモノアリ、

当時給養ノ状態ニ就イテ其ノ一般ヲ示サンニ、主食ハ米飯ニシテ、副食物ハ牛肉魚菜ノ缶詰、乾物野菜、梅干、福神漬等ヲ主ナルモノトシ、調味品ニハ粉味噌、醬油工キス等ヲ用ヒ、稀ニ生肉野菜ノ類ヲ分配セリ、就中鮭ノ缶詰及豚肉ハ、兵卒ノ最モ厭悪スル所ニシテ、多ニ給養上困難ヲ感シタルコト多シ、

馬糧ハ、常ニ大麦ノ定量ヲ受領シタルモ、乾草及藁ノ如キハ其ノ補充困難ナリシヲ以テ、多クハ粟穀黍穀等ノ代用ヲ応用シ、又稀ニ壓搾抹ヲ給養セラレシモ、其ノ内容多クハ変敗シ飼料ニ適セス、従ツテ馬匹衛生上有害ナル感作ヲ受ケシコト少カラズ、然レドモ多年訓練ノ功ヲ積ミタル在来馬ハ、能ク此困苦欠乏ニ堪ヘ、其ノ損耗率極メテ少カリキ、又以テ訓練ノ必要ナルヲ知ルニ足ラン、

野戦郵便ノ制度ハ、大ニ吾人ノ歓迎セシ所ナリ、假令階級ニ応ジ發送ノ回数ヲ制限セラレ、且一々將校ノ点検ヲ受クルニ非ザレバ、之ヲ發送スルコト能ハザル規定ナリト云ヘ、出征軍人及ビ其ノ父兄方此ノ制度ノタメニ亨ケタル快樂ト慰安トハ、到底他ニ比類アルヲ見ツ、就中特筆シテ感謝ニ価スルハ、大阪毎日新聞社方中隊以上ノ部隊全部ニ日々其ノ新聞ヲ寄贈シテ、内地百般ノ出来事ハ勿論、海軍及他軍方面ノ戦況ヲ詳悉スルコトヲ得セシメタルコト是ナリ、六月十四日左ノ通報ニ接ス、

一、⁽²⁾ 左翼隊方面歪頭山附近二八五、六十ノ敵兵アリ、又黄泥川、大上屯東北方約千米ノ高地二八四、五十ノ敵兵アリ、我偵察隊ハ、其六名ヲ射殺セリ、⁽³⁾ 右翼隊方面岔溝附近二八敵兵約百名アリテ、我偵察隊其ノ二名ヲ射殺シ、

馬匹一頭ヲ函獲セリ、

同日午後一時我水雷艇八隻敵ノ艦隊ニ追尾セラレツ、退却スルヲ見ル、須臾ニシテ此ノ敵艦八隻石礁沖ニ停止シテ、我左翼隊ノ陣地ニ対シ數十発ノ砲撃ヲ加ヘ、約四十分ニシテ旅順方向ニ航走セリ、是吾人ガ出征以來初メテ敵艦ニ見ヘ、且ツ其ノ砲火ニ浴シタル日ナリトス、其ノ当時吾人ハ、旅順口ノ確實ニ閉塞サレシヲ聞キ、海軍ニ対シテ毫モ顧慮スル所ナカリシヲ以テ、此ノ砲声ニ対シ聊カ異様ノ感ナキ能ハザリキ、
数日前三十里堡附近ニ炭素病発生セシトノ通報ニ接シタルヲ以テ、人馬ノ交通ヲ遮断セリ、

六月二十六日左ノ通報ニ接ス、

第二軍司令官通報

得利寺附近ノ敵ノ兵力ハ約二箇師団ニシテ、大房身ヨリ城兒山ニ亘リ陣地ヲ占領ス、軍ハ今払曉ヨリ之レガ攻撃ヲ開始シ、第三師団及砲兵旅団ノ主力ハ鐵道線路ニ沿ヒ、第五師団八宋家屯方向ヨリ攻撃ヲ開始シテ、午前九時頃第四師団ノ一部ハ東龍口方向ヨリ、正午頃騎兵旅団八買家屯方向ヨリ、共ニ此ノ戦鬪ニ参加シ、敵ヲ得利寺附近ニ包圍シ、激烈ナル砲撃ノ後敵ヲ北方ニ撃退シ、速射砲數門ヲ分捕ス、我負傷者ハ昨今兩日ヲ合シ約千以内ヲ算スベク、敵ノ負傷ハ多大ナルベキモ未詳ナラス、

此ノ如キ友軍ノ捷報ハ忽チ全軍ノ間ニ喧伝セラレ、士氣振興ノ好材料トナレリ、同日侍從武官伊藤少佐、東宮武官尾藤少佐、我連隊ヲ慰問セラル、

六月十七日曹長大森政市特務曹長ニ進ム、

六月十八日大連灣ノ掃海終リ、始メテ運送船入港ス、

同日軍馬衛生會議委員ヲ任命シ、特ニ病馬ノ発生ヲ予防スルニ努メタリ、

六月二十日常陸丸、佐渡丸ノ二艘、對馬附近ニ於テ浦塩艦隊ノタメニ撃沈セラレシ旨通報ニ接ス、

六月二十一日次ノ通報ニ接ス、

山県元帥ハ參謀總長兼兵站總監ニ、大山元帥ハ滿州軍總司令官ニ、児玉大將ハ滿州軍總參謀長ニ補セラレタリ、

同日師団長ヨリ左記要旨ノ訓示ヲ發セラル、

一、物資徵集ニツキ注意スベキ件

右ハ徵發ト掠奪トノ分界ヲ明カナラシムル主旨ニシテ、敵國ノ人民ニモ非ラザル土民ヲ压制シ、其感情ヲ害スルコトナキ様戒メラレタルモノナリ、然ルニ往々此制令ヲ犯シ、タメニ械官降等其ノ他ノ刑罰ニ触レ、汚名ヲ流シタルモノアリ、而テ此ノ如キ不名譽ノ行為ハ、多ク後方勤務ニ服シテ生命ニ危儀ナキ軍人軍屬、殊ニ予備役軍人間ニ於テ行ハレタルヲ見ル、

二、在来ノ建築物ハ、ナルベク現形ヲ保存スルコト、

右ハ沙河附近ニアリシ露人ノ家屋其ノ他ノ諸建築物ヲ将来我軍ノ用途ニ

供センガタメ、之ヲ破壊スルコトナキ様戒メラレタルモノアリ、然レドモ制令ノ時機稍後レタルガタメカ、諸建築物ノ屋根板ハ勿論、板、木材、鉄線、其ノ他、尚モ廠舎ノ構築又ハ薪炭ノ原料トシテ利用シ得ベキモノハ、殆ンド総テ剝奪セラレタリ、其甚ダシキニ至リテハ、橋ノ欄干ヲ破壊シテ燃料ニ供センモノスラアリ、

三、工事ハ、日ヲ追フテ完全堅固ナラシムベキコト、

掩体ノ構築ハ、平素教育セリト雖、徒ニ形式ニ流レ、其ノ断面薄弱ニシテ、設備ヲ完全ナラシムベク要求セラレタルモノナリ、然レドモ此ノ注意ハ、戦闘ノ回数ヲ重ヌルニ從ヒ、土工作业ノ必要ナルヲ感ジ、自然ニ作業ニ慣熟シテ、遂ニハ殆ンド完全無欠ノ掩体ヲ構築シ得ル程度ニ進歩スルニ至リ、

四、馬匹衛生ニ就テハ、数層ノ注意ヲ加フベキコト、

我連隊ハ、隊馬総數千八十四頭中病馬百七十六頭、欠馬又ハ交換ヲ要スル馬徵発馬匹中二十六頭、其ノ他二頭アリ、即徵発馬ノ總數ニ対シ補充ヲ要スルモノ八八%ナリ、又以テ徵発馬匹ノ虚弱ナルヲ知ルニ足ルベシ、

六月二十二日次ノ内訓ニ接ス、

明後二十四日師団ハ、花紅溝西方高地ヨリ黄泥川、大上屯ノ南北ニ亘ル高地ニ前進スル筈、依テ明日中ニ前進ノ準備ヲナシ置クベシ、但シ他ニ洩ルゝガ如キコトアルベカラズ、

此ノ日師団命令ニ基キ、欠馬七十六頭ノ補充トシテ、第四糧食縦列ヨリ一時借入ルゝコトナレリ、其ノ区分左ノ如シ、

部隊号	1	2	3	4	5	6	連隊段列計
頭數	一一	一六	一四	二	一〇	七	五二
							七六

又脊囊ハ戦闘動作ニ不便ナルヲ以テ、砲手馭者共ニ背負袋ヲ調製シ、携行スルコトナレリ、
六月二十三日前進期日敵ニ曝露セシ虞アリシヲ以テ、二十六日ニ延期セラル、此ノ二十六日ナル日ハ、南山攻撃以來第三軍方多く戦闘ヲ開始シタル日ニシテ、月二因吉凶定メナカリシ日ナリトス、此ノ日左ノ通報ニ接ス、

第一軍通報

一、「マドリロフ」ハ、目下与京ニアリテ六、七百騎ヲ有スルモノノ如シ、宝馬集通遠堡、四門子ノ線ニハ依然敵兵アリ、
二、軍八、明日午後出發準備ヲナシ、二十三日ヨリ運動ヲ起シ、敵ヲ压迫シツツ二十六日ヲ以テ六道溝、干草店、李家舖子、連山関ノ南方約四里ノ線ニ到達セントス、

第二軍通報

熊岳城ニハ若干ノ敵兵アリ、軍八明日李官材川ノ線迄前進ス、
本日旅順方面ニ当リ段々タル遠雷ノ轟クヲ聞ク、之レ旅順艦隊ノ出動ニ対シ、我東郷艦隊迎撃セシ砲声ニシテ、敵ハ多大ノ損害ヲ受ケ、再旅順港内ニ退却スルノ已ムヲ得サルニ至リ、其ノ結果敵ノ陸海軍ハ、互ニ其ノ無能ヲ罵リテ相反目スルニ至リタリト云フ、

本日ヲ以テ第一、第二、第三軍及ビ独立第十四師団ハ、滿州軍總司令官ノ令下ニ依ル、

六月二十六日前進ノ準備ヲナス、

六月一日以來第一大隊ハ左翼隊ニ、第六中隊ハ其ノ後右翼隊ニ属シテ、共ニ第一線ニ出テ、他ハ予備隊トシテ各々其任務ニ服スルコト殆ンド一ヶ月、其ノ間日々掩体ノ構築、廠舎厩舎ノ設備ニ任ジ、又日課ヲ定メ日夜人馬ノ訓練ニ努メ、一日トシテ寧日ナカリシカバ、士卒ノ勞力ハ平時ニ比シ幾倍ナリシヲ知ラズト雖、土氣旺盛ニシテヨク其ノ職務ニ勉勵シ、毫モ倦怠ノ色ナク、只々一日モ速カニ敵ニ見ヘテ素攘ヲ達セバヤト祈リツツアリシ折カラトテ、一旦前進ノ命令ニ接シテヨリ、將士ノ満足ニ方ナラズ、上下拳ツテ出發ノ準備ニ倍々タリキ、素ヨリ滞陣ノ間ニモ斥候偵察ノ任務ヲ以テ遠ク適地ニ侵入シ、ステニ敵火ニ浴シタルモノナキニ非ザレト、其ノ多クハ性來始メテノ戦闘ナレバ、自ラ武者振スルモ又止ムヲ得ザルコトナルベシ、

第二章 六月二十六日ヨリ七月二十五日ニ至ル間ノ狀況

第一節 六月二十六日ノ前進及劍山、老坐山ノ占領

六月二十六日初メテ敵ト戦闘ヲ交ヘントスル事トテ、土氣殊更ニ引立チ、水ニ浴シテ身体ヲ清メ、服装ヲ改メテ死出ノ旅路ノ心安カラント願ハヌナカリキ、此ノ日ノ前進ハ左ノ部署ニヨリテ、二十五日夜半ヨリ二十六日正午ニ亘リ、整然トシテ秩序ヨク施行セラレタリ、

第十一師団命令 六月二十五日午後一時

於南泡子崖師団司令部

軍隊区分
右縦隊
長 山中少将
歩兵第四十四連隊
騎兵一小隊
砲兵第二大隊(四中隊欠)
機関砲第七、第八小隊
工兵第二中隊
衛生隊半部
中央縦隊
前衛
司令官 西山大佐
歩兵四十三連隊(二大隊欠)
騎兵半小隊
砲兵第四中隊
工兵一小隊
本隊(同行軍序列)
師団司令部
歩兵二十二連隊(一中隊欠)

一、我前面ノ敵ノ就テハ、大ナル変化ヲ認メズ、
二、師団八、明日花紅溝西方高地ヨリ黄泥川大下屯ノ西方二巨ル高地ノ線ニ向ヒ前進セントス、
第一師団八、盤道ノ東南約六百米(花紅溝ノ西北)標高²³⁸ノ高地ヲ占領スル筈、
三、右縦隊八、午前五時鐘家屯ヲ出發シ、乱泥橋東方一帶ノ高地ニ向ヒ前進スベシ、
第一師団ト連絡スベシ、
四、中央縦隊ノ前衛八、午前三時三十分核桃溝ヲ出發シ、凌水河子ヲ經テ乱泥橋南方約三千米ニアル標高³⁶⁸及ヒ西部猪圈子溝西方高地ニ向ヒ前進シ、特ニ凌水河、程家屯ヨリ歪頭山北方ニ通ズル道路ノ方向ヲ搜索シ、且右縦隊ト連絡スベシ、
本隊ノ諸隊ハ、作ノ如ク動作スベシ、
一砲兵第十一連隊本部並第一大隊(二中隊欠)及連隊段列、工兵第十一大隊本部及半小隊、衛生隊半部八、砲兵連隊長ノ区署ニヨリ、又歩兵四十三連隊ノ第二大隊及第二十二連隊八、如上ノ順序ヲ以テ前進シ、午前六時迄ニ凌水河子北方畑地ニ開進スベシ、
但旧右翼隊ノ前哨八、午前五時頃後ニ於テ撤去シ、所属隊ニ追及セシムベシ、

歩兵四十三連隊二大隊
騎兵十一連隊(二小隊ト三分隊欠)
砲兵連隊本部第一大隊(一中隊欠)並連隊段列
工兵十一大隊本部及半小隊
衛生隊半部
左縦隊
長 神尾少将
歩兵第十二連隊
騎兵半小隊
砲兵第二中隊
機関砲第五小隊
工兵第三中隊(一小隊半欠)

六月二十六日諸隊八、此ノ命令ニ基キ悉ク夜半集合地ニ至リ、肅々トシテ行軍序列ニ入り、夜ノ暗ヲ冒シテ前進シ、払曉敵兵數十名ノ守備セシ鷄冠山及歪頭山ヲ占領シ、三縦隊共略同線上ニアリテ行進ヲ繼續シ、我海軍八、小平島附近ニ於テ威赫射撃ヲナシ、共二大ナル抵抗ヲ受クルコトナク、正于頃二八既ニ予定ノ線附近ニ前進ス、然ル中央縦隊及左縦隊ノ前面二八、微弱ナル敵ノ守備兵アルヲ以テ、之方攻撃ノタメ午後三時左記要旨ノ命令ヲ受領セリ、
第十一師団命令 六月二十六日午後一時於歪頭山

2 機関砲第六小隊ノ予備彈藥八、午前六時三十分迄二本隊ノ開進地ニ前進スベシ、
3 騎兵第十一連隊(二小隊ト三分隊欠)八、午前七時迄ニ北沙川口ニ前進スベシ、
騎兵小隊ヲ午前五時北泡子崖ニアル軍司令部ニ遣スベシ、
五、左縦隊八、午前三時三十分西部黒石礁ヲ出發シ、北河口ヲ經テ黄泥川、大上屯西方一帶ノ高地ニ向ヒ前進スベシ、
中央縦隊及小平島ニ來ルベキ海軍ト連絡スベシ、
六、右縦隊ノ大行李八、同隊長ノ指揮下ニ屬ス、中央及左縦ノ大行李八、午前九時迄ニ西沙河口南方畑地ニ集合シ、師団大行李長ノ指揮ヲ受クベシ、
七、輜重第一梯隊八、午前九時迄ニ西沙河口ニ、同第二梯隊八、臭水屯ヲ先頭トシテ停止シアルベシ、
八、予八、午前五時三十分迄ニ凌水河子ノ開進地ニ至ル、

軍隊区分
右翼隊
旧右翼隊
一、乱泥橋南方三百米ノ標高³⁶⁸ノ高地二八、敵兵約五十名アリ、西山連隊八、此ノ敵ヲ擊退スル筈、
黄泥川、大上屯西方高地二八敵ノ歩砲兵(兵力未

第十一師団長 土屋光春

中央隊

旧中央縦隊ノ前衛及歩兵第四十三連隊ノ第二大隊

左翼隊

旧左翼隊

予備隊

旧中央縦隊本部

歩兵第四十三連隊(第二大隊欠)

詳)アリ、

二、師団八、乱泥橋東方一帯ノ高地ヨリ黄泥川、大上屯南北二巨ル高地ヲ占領セントス、

三、右翼隊八、盤道ノ東南標高²³⁸ニアル敵ヲ撃退シタル後、一部隊ヲ残シ爾後全標高ノ東南約千米ノ鞍部ニ通ズル道路ヨリ黄泥川、大上屯北方高地二巨ル間ヲ占領シ、右翼隊ト連絡スベシ、

堅固ナル工事ヲ施スベシ、

五、^六左翼隊八、黄泥川、大上屯及其南北一帯ノ高地ヲ占領シ、中央隊ト連絡シ堅固工事ヲ施スベシ、

六、^六予備隊八、左ノ如ク村落露宮ヲナスベシ、

砲兵連隊本部及第一大隊(第二中隊欠)並連隊段列 凌水河、高家屯、核桃溝

午後四時二至リ戦機漸ク發展シ、殊ニ中央隊方面二方リテ段々タル砲声ノ轟クヲ聞ク、是レ第四中隊ガ標高³⁶⁸ノ高地(北高地八歩兵第四十三連隊ニ依リテ占領セラレタルヲ以テ、其ノ下士卒ノ出身地タル阿波ノ国剣山ノ名ニ因ミ、軍司令官ヨリ剣山ト命名サレシ有名ナル高山ナリ)ニアル敵ノ歩砲兵ヲ射撃シテ、友軍ノ攻撃ヲ援助シツツアル砲声ニシテ、之ヲ聞キタル將士ハ、何レモ血湧キ肉躍ルト同時ニ、一面羨望ノ念ヲ禁ズル能ハザリキ、此ノ時二方リ予備隊ニアリシ砲兵全部ヲ第一線ニ進出セシメ、此ノ砲声ニ参加セシムベキ師団命令ニ接ス、茲ニ於テ連隊長ハ、大隊長ト共ニ急騎シテ第一線ニ出テ、第一、第三中隊及連隊段列八、二里余ノ行程ヲ殆ソド駈歩ニ等シキ速度ヲ以テ是ニ跟随ス、惜哉、未ダ陣地ニ達セズシテ剣山八既ニ我有ニ帰セシヲ聞キ、遂ニ戦鬪ヲ交フルニ至ラズシテ、第一、第三中隊ハ猪圈子溝附近ニ、連隊段列ハ核桃溝ニ帰還シ、宿営スベキ命令ヲ受ケ、將士落膽ノ状歴然トシテ眠ニ見ユルガ如シ、

剣山八、歩兵二中隊(バラノフ)砲(有烟火薬ヲ用ユル旧式砲)二門ヲ以テ守備シアリシガ、我砲火ノタメ(バラノフ)砲八忽チ破壊セラル、其ノ歩兵八兵

員ノ四分ノ三ヲ失ヒ、遂ニ命令ヲ待タズシテ退却スルニ至レリ、是レガタメ守備隊長タリシ「ロパチン」大尉八、師団長「フォーク」少将ノ告発スル所トナリ、判決ニ先チテ自尽セリト云フ、

剣山攻撃ニ於ケル我軍ノ死傷ハ將校以下百三十五名、是ニ対セシ敵ノ死傷ハ百三十三名、又消費弾薬ハ第四中隊ニ於テ三百四十九発、第五中隊ニ於テ三十三発、其ノ他ノ中隊ハ此砲声ニ参加セスシテ待機ノ姿勢ニアリキ、

同日午後五時左翼隊八、一部ヲ以テ老坐山附近ヲ占領シ、其主力ハ、双頭山背

後ノ谷地ニ集合ス、此ノ時二当リ敵ノ海軍八、陸正面ノ砲兵ト協力シテ我第一線附近ヲ掃射シ、其流弾盛ニ我予備隊ノ位置ニ落達シ、我レ位置ヲ転ズレバ敵

弾之ニ從ヒ、恰モ我ヲ照準シテ射撃スルモノノ如ク感ゼラレシハ、諸戦ニ於ケル神經過敏ノ結果ナルベシ、午後六時二至リ戦機漸ク集結スルヤ第一線部隊ハ

夫々陣地ニ就キ工事ヲ始ム、此ノ作業タル敵ヲ眼前近距離ニ控工シコトトテ、何レモ遮蔽ニ努メ、我行軍ヲ敵ニ秘匿スルニ力メタリシガ、大胆ナル敵ハ平然稜線上ニ屹立シ、甚ダシキニ至リテ八我ニ面シテ裕然休憩スルモノアリ、以テ彼我國民性ノ同ジカラザルヲ知ルニ足ラン、

此ノ日ノ戦鬪ニ於テ彼我ノ海軍共ニ陸戦ニ声援セリト雖、相互ノ連絡不充全ナリシタメ、所望ノ効果ヲ適時ニ発揚スル能ハザリキ、

六月二十七日歩兵第四十參連隊長西山大佐ヨリ左ノ通報ニ接ス、

昨二十六日我然衛ノ戦鬪ニ於テ坂田砲兵大尉ノ取リシ処置ニ就テ八間然スル処ナク、陣地ノ撰定砲撃ノ方法等頗ル適切ニシテ、我歩兵攻撃ノタメ至大ノ援助ヲ与ヘラレシハ、満腔謹謝スル所ナリ、

此ノ通報ニ対シ、連隊長足立大佐ハ、次ノ回答ヲナス、

昨二十六日ニ於ケル貴隊ノ戦捷^ニニ対シ満空ノ祝意ヲ表ス、此ノ戦鬪ニ於テ貴官ノ指揮下ニ動作セシ我第四中隊ノ成果ニ対シ、称賛ノ辞ヲ辱フセシハ、望外ノ光荣トシテ深く感謝スル所ナリ、

終ニ臨ミ歩兵第四十三連隊ノ諸戦ニ於ケル勝利ニ対シ、重テ祝意ヲ表シ、光輝ノ更ニ加ハリシ貴連隊ノ軍旗ニ対シ、謹ンデ敬意ヲ表ス、

師団命令ニ基キ次ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 六月二十七日午後七時

於核桃溝連隊本部

一、昨日我中央隊及左翼隊二対セシ敵八、大石洞ノ西南王家店方向ニ退却セリ、師団八、乱泥橋東方一帯ノ高地ヨリ黄泥川、大下屯ノ西方高地ヲ占領ス、右翼隊八、盤東ノ東南標高²³⁸ノ高地ヨリ乱泥橋南方約千五百米ニ在ル三叉路ノ東南高地迄、中央隊八剣山ヨリ黄泥川、大上屯ノ西北約千五百米ニ在ル高地ノ突起部迄、左翼隊八同地ヨリ老坐山附近ニ至ル間ヲ占領ス、

二、連隊八、次ノ如ク村落露営ヲナサントス、

本部及第一大隊(第二中隊欠)

核桃溝

連隊段列

核桃溝東方無名部落

連隊長 足立大佐

剣山占領ノ結果八、敵ノ最モ痛痒ヲ感ゼシ所ニシテ、爾後屢々回復攻撃ヲ施行セントシタルモ、時期既ニ後レ、遂ニ其希圖ヲ断念シ、続テ目下占領セル陣地ガ日本軍ノタメニ瞰制セラレ、防禦ニ不利ナルヲ見テ、「フォーク」少将八、鳳凰山ノ線ニ向ヒ退却スルニ決シ、其ノ一部八、既ニ退却ノ運動ヲ開始シタルモ、日本軍ノ追撃急ナラザルヲ見ルヤ、更ニ其ノ決心ヲ翻シ、二十七日以来専ラ現在ノ陣地ヲ固守スルタメ工事ノ施設ニ努メタリ、

七月一日午前夜半内地ニ比類ナキ暴風雨アリ、幕営掩蔽部等損害頗ル多シ、就中材料監視ノタメ南沙河口ノ旧陣地ニ残留セシメタル第二中隊ノ予備一等卒門間藤吉ナル者、廠舎ノタメニ庄倒セラレ、先頭第一ノ陣没ヲ遂ゲタリ、

当時赤痢患者各隊ニ散発シ、且民間ニ天然痘流行ノ徴アリシヲ以テ、衛生委員ヲ設ケ防疫ニ尽瘁セリ、

又土民中露探アリ、意外ノ手段ヲ以テ我方軍ノ所在ヲ敵ニ通報スルヲ以テ、是ニ対スル警戒ヲ嚴ニセリ、

此ノ日見習獣医六久保喜久馬三等獣医ニ昇進シタル通報ニ接ス(六月十三日附)、七月二日師団命令ニ基キ左記要旨ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 七月二日午後六時三十分

於核桃溝連隊本部

一、明三日ヨリ軍隊区分中左ノ通り変更セラレ、

中央隊

長 神尾少将

歩兵第四十三連隊

騎兵第一中隊

砲兵第一大隊(二中隊欠)

機関砲第三小隊

工兵第三中隊(一小隊欠)

長 新山大佐

左翼隊

砲兵第十二連隊

騎兵一小隊

砲兵第二中隊

機関砲第五小隊

工兵第三中隊ノ一小隊

予備役

砲兵第一大隊(第二中隊欠)及騎兵一小隊ヲ删除シ、砲兵第四中隊ヲ加フ、

二、第一大隊(第二中隊欠)八、明三日午前十時迄ニ剣山東南麓ニ至リ、中央隊長ノ指揮下ニ入ルベシ、

此ノ日午後老坐山方面ニ於テ小戦アリ、我前進部隊八、稍優勢ナル敵ト相對ス、

第二節 七月三日ヨリ五日ニ亘ル敵ノ剣山回復攻撃

七月三日午前七時第一大隊(第二中隊欠)八、宿営地出發、中央隊ノ第一線ニ至ル、午後三時大石洞東方高地ニ敵ノ歩兵約二中隊、王家屯ノ北方ニ二中隊、其南方高地ニ敵ノ野砲八門現出シ、其ノ砲兵八、我陣地ニ対シ猛烈ナル疾風射ヲ加フ、然ルニ惜哉、我山砲ノ射程以外ニ在ルヲ以テ、中央隊ノ砲兵(第一、第三、第四中隊)八、之ニ応戦スルヲ得ズ、己ムヲ得ズ唯其ノ歩兵ヲ射撃シテ其希圖ヲ挫折スルニ努力セリ、独リ左翼隊所屬ノ第二中隊八、双頂山上ニアリテ老坐山北方鞍部ニ現出シタル敵ノ五十七密速射砲四門ト猛烈ナル砲戦ヲ交ヘ、瞰制ノ利ニ因リテ遂ニ之ヲ制圧シ、続テ前進スル敵兵約二中隊ニ多大ノ損害ヲ与ヘ之ヲ撃退セリ、又右ノ如キ状況ナリシヲ以テ、第一大隊(第二中隊欠)ト交代シテ予備隊ノ位置ニ就クベキ第四中隊八、依然第一線ニ止マレリ、本日ノ消費弾薬八、榴彈三百七十八発ナリ、

関東司令官ステッセル中将八、剣山ノ喪失ヲ深く遺憾トシ、以為ラク同高地ヲ

日本軍ノ手中ニ置クトキハ、第四、第七師団ノ連絡ヲ遮断セラル、ノミナラズ、従来前面ノ諸兵ヲ監視シ得タル同高地ハ、今ヤ却テ日本軍ヲシテ露軍陣地ノ情況ヲ視察セシムルノ不利アリ、

且ツ日本軍ノ後続部隊々々大連附近ニ輻送セラル、ノ報アルニ由リ、其ノ未ダ強大ナル増援ヲ得ザルニ先チ、速ニ剣山ヲ恢復セザルベカラズト、即右翼隊地区ニ第七師団ノ集成部隊ヲ増加シ、七月二日大白山附近ニ於テ一部ノ成功ヲ収ムルヤ全軍拳ツテ攻勢ニ転シ、茲ニ七月三日ヨリ五日ニ亘ル剣山恢復攻撃ヲ実施スルニ至レリ、

七月四日ニ至リ敵ハ漸次増加シテ、中央隊ノ正面ニ八敵歩兵約三連隊及砲十六門ヲ数フルニ至レリ、其ノ攻撃頗ル猛烈ナリ、其目的蓋シ剣山ノ奪取ニアルベキハ疑ヲ容レズ、従ツテ中央隊方面ノ戦況八頗ル猛烈ニシテ、彼我第一線八僅ニ三百米ニ達シ、且ツ敵ハ屢々剣山ニ向テ突撃ヲ企図シ、彼我共ニ損害頗ル多シ、

午後一時第三、第四中隊ノ陣地ハ、敵ノ十字火ヲ受クルニ至リシヲ以テ、維持困難トナリ、後方稜線ニ陣地ヲ変換セリ、左右翼隊ノ戦闘ハ、未ダ甚ダシク活発ナルニ至ラズ、

午後六時師団命令ニ基キ次ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 七月四日午後六時

於西部猪圈子溝西南方陣地

- 一、我中央隊ニ対スル敵ハ、歩兵約三連隊重砲八門ナルガ如シ、師団ハ、現在ノ姿勢ニ在リテ従来ノ目的ヲ続行ス、
- 二、歩兵第四十四連隊ノ二中隊、砲兵連隊本部並全第四中隊ハ中央隊ニ、歩兵第十二連隊ノ一中隊、工兵第三中隊ハ予備隊ニ、騎兵連隊ハ左翼隊ニ属セラル、
- 三、中央隊ニ属スル砲兵隊ハ、砲車ニ属スル正規ノ人員ヲ陣地ニ残留シ、其ノ他八高地東麓附近ニ露営スベシ、
- 四、連隊段列ハ、第一線ノ各隊ニ弾薬ノ補充ヲ終レバ、弾薬縦列ヨリ補充ヲ受ケ、西部猪圈子溝ニ至リ露営スベシ、

五、第一大隊(第二中隊欠)及第四中隊ノ大行李ハ、炊爨終レバ凌水河子ニ至リ、師団大行李長ノ指揮ヲ受クベシ、

連隊本部及連隊段列ノ大行李ハ核桃溝ニ集合シ、凌水河子ニ至リ、師団大行李長ノ指揮下ニ入ルベシ、

六、予ハ、陣地ニアリ、

連隊長 足立大佐

又左ノ通報ニ接ス、

一、新二右翼隊ノ主幹タルベキ後備歩兵第一旅団(一連隊欠)ハ、交代ノタメ明朝来看ノ筈、

二、騎兵一中隊砲兵第二大隊(四中隊欠)及工兵第二中隊ハ、新右翼隊長友安少将ノ令下ニ属セラル、

当時敵ノ火砲八新式ノ速射野砲ニシテ、四門若クハ八門毎ニ陣地ヲ占領シ、疾風の射撃ヲ以テ盛ニ我陣地ヲ砲撃セリ、然ルニ我山砲八射程僅ニ四千ニスギス、発射速度又緩ナリシヲ以テ、遺憾ナガラ敵砲兵ト対等ノ戦門ヲ交フルヲ得ス、実ニ痛恨ノ極ミナリシガ、其ノ歩兵ニ対シテハ猛然立テ之ヲ撃退シ、ヨク歩砲協同ノ実ヲ揚グルヲ得タリ、此ノ日ノ戦闘ニ於テ消費弾薬榴霰彈千五百八十四発、榴彈三十六発、損害將校以下二名ナリ、

午後七時頃ヨリ雨大ニ振り、道路泥濘被服湿潤、加フルニ戦況稍々我ニ不利ニシテ、大行李ヲ後退セシメ、海軍砲ヲ以テ後方ニ收容陣地ヲ占領セシメシ等ノ故ヲ以テ、士氣稍々阻喪セルノ傾アリ、実ニ敵ノ兵力ヲ過大視スルコト及公然過早ニ退却ノ準備ヲ命ズルガ如キコトハ、神經過敏ナル戦場ニ於テ士氣ニ影響スルコト甚ダシキヲ以テ、統帥者ノ大ニ戒慎スベキコトナルヲ感シタリ、

昨日来流石猛烈ニ攻撃シ来リタル敵モ、我抵抗ノ意外ニ頑強ナルニ避易シ、僅カニ剣山ノ山腹ト老坐山方面ヲ占領シ得タルニ止マリ、七月五日以後断然攻撃ノ希圖ヲ抛棄シテ、近ク我ト相對シ、盛ニ防御工事ヲ実施シテ我軍ノ攻撃ニ備ヘントスルニ至レリ、

此ノ戦闘ニ於テ我軍ノ死傷ハ二百三名、敵ノ損害ハ六百一名ニシテ、如何ニ其攻撃ノ困難ナリシカラ察知スルニ足ル、

此ノ日敵ノ艦隊數艘我左翼隊ノ左側海面ニ現出シ、眼上ノ瘤タル双頂山^(頂力)上ノ第二中隊陣地ニ対シ猛烈ナル攻撃ヲ加ヘタリ、此ノ双頂山^(頂力)ハ敵ノ防禦線ハ勿論、其ノ背後ノ展望容易ニシテ遠ク旅順要塞ノ本防禦線及旅順旅順港口ヲ視察シ得ルノ便アリシヲ以テ、茲ニ我砲兵ヲ存置スルコトハ、敵ノ最モ厭惡セシ所ナリシガ如ク、其ノ海軍ハ屢々出動シテ、無慮数千ノ彈丸ヲ此ノ陣地ニ放射セリ、而シテ我第二中隊ノ受ケタル損害ハ、僅ニ二個ノ標桿ト砲隊鏡ノミ、全夜敵ノ決死隊劍山上ノ我幕営ヲ襲撃シ、竹村歩兵大尉以下數名ヲ朴ス、其ノ大胆ニシテ巧妙ナル動作ハ、流石歐羅バ強兵タルニ耻ス、

七月五日以後ニ於ケル敵ノ兵力左ノ如シ、

歩兵五十二中隊ト東狙兵第七師團ノ約半部(此兵力未詳)

徒歩獵兵十二隊 乘馬獵兵四隊

野砲六十門 五十七密米砲八門

機關砲四門

而テ其半部ハ我師團ト對抗ス、而テ此兵力ヲ以テ七月五日以後日夜工事ニ尽瘁シ、其陣地ヲ堅固ナラシムルニ力メタリ、其要領ハ全線ニ亘リ約九個ノ角面堡ヲ構築シ、各堡ハ太キ木材ヲ用ヒテ掩蓋ヲ設ケ、其他ノ部分ニハ深サ身長ヲ没スル一連ノ散兵壕ヲ設ケ、是ガタメ所要ノ木材其他材料ハ要塞内ヨリ搬致シ、又工事ノタメ多數ノ清国人夫ヲ使役セリ、「フォーク」少將ハ特ニ命令ヲ下シ、火砲ヲ掩護スルタメ、土壕ヲ堆積シタル木舎ヲ構築セシメ、又所ニヨリ砲手ノタメニ掩蓋ヲ設ケシメタリ、

第三章^(節力) 七月六日以後二十五日ニ至ル迄ノ状況

七月七日日本軍ノ工事ヲ妨害シ、其掩蓋ヲ破壊スル目的ヲ以テ、要塞内ヨリ十五珊米白砲二門ヲ前進陣地ニ送り、劍山ニ対シ射撃シ得ル如ク配置セリ、七月八日第一中隊ハ、其陣地ヲ海軍陸戰重砲隊ニ譲リ、第三中隊陣地ニ近ク其位置ヲ交換セリ、七月九日戦利野砲十二門及陸戰重砲隊十二斤砲六門ヲ当師團ニ配属セラル、其ノ他徒歩砲兵第二連隊第一大隊モ亦当方面ニ招致セラレタリ、是等砲兵ノ増援

ハ、我等砲兵隊ノタメニ八百万ノ援兵ヲ得タルガ如ク、士氣上甚大ナル好感ヲ与ヘタリ、是レ吾人ノ山砲ハ、射距離及速度ノ關係上、到底銳利ナル敵ノ野砲ト対戦スルヲ得ス、常ニ苦境ニアリタレバナリ、

七月十一日砲兵伍長十六名軍曹二、上等兵七名伍長二任官セリ、實ニ戦時昇進ノ速力ナル驚クニ堪ヘタリ、

此ノ日要塞ヨリ更ニ野戦白砲二門ヲ陣地ニ送り、十二日払曉ヨリ双頂山^(頂力)及劍山ニ向ヒ射撃ヲナセリ、

七月十二日下士卒六十五名、馬匹六十五頭、第一回補充トシテ到着ス、依テ二十八名ヲ連隊ニ、残余ヲ彈藥大隊ニ編入シ、馬匹八兼テ第四糧食縦列ヨリ借用セシヲ以テ之ヲ返却シ、補充馬ヲ夫々各中隊ニ分配セリ、

此ノ日敵ノ曲射砲我中央隊及左翼隊ニ対シ射撃ヲ開始ス、吾人ハ既ニ平射砲彈ノ比較的掩護シ易キヲ実験シタルモ、曲射砲彈ハ大角度ヲ以テ、到ル処ニ落達スルト其所在ヲ発見スルコト困難ナルガタメ、之ニ酬ユルノ手段ナキニヨリ、其士氣ニ及ボス交感ハ、決シテ平射砲ノ比ニ非ザルヲ感ジタリ、

本日左ノ通報ニ接ス、

第二軍ハ、昨十一日蓋平附近ノ敵陣地ヲ攻撃シ、敵ヲ北方ニ撃退セリ、七月十七日午前一時連隊長ハ、連隊副官及第一大隊副官ヲ伴ヒ、歩兵第四十四連隊捜兵ノ援護ヲ受ケテ劍山ニ上リ、敵情及陣地ヲ偵察シテ歸還セリ、

七月十八日皇后陛下、皇太子妃殿下御調製ノ巻軸繙帯及常ノ宮内親王殿下御手製ノ巻軸繙帯ヲ當軍ニ下賜セラレタル恩命ニ接ス、吾人ハ出征ノ初メ各々馬丁ヲ伴ヘリ、然ルニ係稍々不利ニ赴キシト、戰場ノ光景頗ル慘憺タリシヲ以テ、義務心ニ乏シキ彼等無智ノ輩ハ、一部ヲ除ク外鮮雇歸還ヲ出願セシヲ以テ之ヲ聴許シ、其代用トシテ糧食縦列ノ輜重輸卒ヲ借用スルコト、ナレリ、

七月十九日左ノ通報ニ接ス、

第一軍方面ニ於テハ、去ル十七日敵兵約二師團「ケルレル」將軍ノ指揮ヲ以テ、濃霧ニ乘ジ摩天嶺附近ノ陣地ニ向ヒ猛烈ニ攻撃シ来リ、第二師團ノ頑強ナル抵抗ヲ以テ遂ニ之ヲ撃退セリ、

七月二十日以後北陸ノ健児ヨリナル第九師団八、陸統大連ニ上陸シ、第一、第十一師団ノ中間地区ニアリテ爾後ノ戦闘ニ参与セントス、是レガタメ師団ノ戰鬥正面ハ自然ニ短縮セラレ、第二大隊(第四中隊欠)ハ、二十三日其ノ陣地ヲ第九師団ノ砲兵ニ譲リ、予備隊トナリ、核桃溝ニ至リ宿営セリ、七月二十一日第六中隊ノ砲車一門敵弾ノタメニ破壊セラル、

七月二十三日双頭山附近ノ砲兵八、老坐山附近ノ露軍陣地ヲ攻撃シタメニ、露軍ハ掩蓋五個機関砲二門ヲ破壊セラレ、將校二下士卒五負傷ス、又同夜露軍右翼ノ警備ニ任セシ水雷艇三艘、日本水雷艇タメニ攻撃セラレ、大損害ヲ受ク、此ノ如キ状況ノ下ニ、吾人ハ約一ヶ月ヲ此陣地ニ消費セリ、其ノ間屢々砲撃ヲ加ヘテ敵ヲ畏縮セシメリト雖、日課ノ大部ハ陣地ノ増築及夜間ノ警戒ニシテ、戰場ノ生活トシテハ寧閑散ノ状態ニアリキ、此ノ間予ハ左翼隊陣地ニ在リテ屢々壯快ナル海戦ヲ目撃シ、且ツ連日敵海軍ノ旅順港口ニアリテ掃海ニ従事シツツアルヲ見テ、其ノ出動ノ意アルヲ察シ、又屢々敵海軍ニ砲撃セラレテ其ノ行動ヲ仔細ニ觀望シツツ、所謂空前絶後ノパノラマ的境涯ニ立チ、愉快ニシテ詩趣ヲ帯ビタル生活ヲ嘗ムヲ得タリ、

第三章 七月二十六日ヨリ二十八日ニ亘ル大白山攻撃

七月中旬以來第九師団ノ約半部及特種砲兵隊並野戰砲兵第二旅団ノ一部ハ、陸統第三軍ニ増加シ来リ、敵モ亦其ノ陣地ノ構築着々トシテ進捗シ、殆ド半永久築城ノ価値ヲ有スルニ至レリ、更ニ時日ヲ遷延セシガ、遂ニ難攻不落ノ城砦ヲ構築スルニ至ラン、茲ニ於テ我第三軍ハ、七月二十六日ヲ期シテ太白山ヨリ安子嶺ヲ經テ双台溝ニ亘リ、堅固ニ防禦セル敵ヲ攻撃スルニ決ス、此ノ時ニ於ケル彼我ノ兵力左ノ如シ、

- 露軍 歩兵七十三中隊 騎兵一中隊
- 徒歩獵兵十八隊 乘馬獵兵四隊砲兵六十四門
- 機關銃二十九門 五十七密砲六門
- 日本軍 第十一師団 後備歩兵第一、第四旅団ノ全部
- 第九師団ノ約半部 特種砲兵隊計七十四門

野砲兵第二旅団ノ一部

即チ我兵力ハ、敵ニ比シ略ニ倍ニ達シタルヲ知ルベシ、此ノ時ニ當リ「クルバトキン」大將ハ、「ステッセル」中將ニ通報シテ、近キ將來ニ八滿州軍必ズ旅順ヲ救援スベキガ故ニ、要塞ノ守兵ハ堅忍不拔ノ精神ヲ鼓舞シテ、極力抵抗ヲ繼續スベキコトヲ訓示セリ、七月二十五日大白山攻撃ニ関スル師団命令ヲ受ク、其ノ要旨左ノ如シ、

第十一師団命令 七月二十五日午前八時

於凌水河子師団司令部

- 軍隊区分
 - 右縱隊
 - 長 山中少將
 - 歩兵第二十二連隊
 - 歩兵第四十四連隊(第三大隊欠)
 - 騎兵小隊長ノ指揮スル半小隊
 - 機關砲第六、第八小隊
 - 工兵第三中隊
 - 左縱隊
 - 長 神尾少將
 - 歩兵第十二連隊
 - 歩兵第四十四連隊ノ第三大隊
 - 騎兵小隊長ノ指揮スル半小隊
 - 機關砲第五小隊
 - 野戰砲兵第二中隊
 - 工兵第二中隊
-
- 一、師団前面ノ敵ハ、老坐山南北高地ノ一帯、茲ニ大白山東方及北方高地稜線ヲ堅固占領シ、又王家店南北ノ高地ニ八敵ノ砲兵アリ、敵ハ尚我前面セリ、北方安子嶺ヲ經テ双台溝ニ亘ル線ヲ占領シアリ、我艦隊ハ、二十五日ヨリ双台溝方向ニ対シ、我軍ニ援助ヲ与ヘ、且ツ其ノ主力ハ、旅順ノ敵ヲ制圧スル筈ナリ、
 - 二、軍八、前面ノ敵ヲ攻撃ス、第九師団ハ、我右翼ニ連撃シ、今夜盆溝南北ニ亘ル高地ヲ占領シ、明日攻撃ニ転スル筈、
 - 三、師団ハ、明日林家庄兒南北高地ノ線ニ迄前進スル目的ヲ以テ、明拂曉先老坐山附近ヨリ其ノ北方ニ亘ル高地ノ一帯ヲ占領セントス、
 - 四、左翼隊ハ、明拂曉老坐山附近ヨリ其北方高地線ニテ黄泥川、大上屯ノ正西約二千米ノ最高部ニ亘ル敵ノ陣地ヲ攻撃スベシ、

野戦砲兵隊

野戦砲兵第十一連隊

(二中隊欠)

特種砲兵隊

長 江藤砲兵大佐

陸戦重砲兵隊(十二斤砲十門)

野戦重砲兵二大隊(八門)

徒歩砲兵独立大隊(十二門)

予備隊

歩兵第四十四連隊ノ三

大隊

歩兵第四十三連隊(三

大隊欠)

騎兵十一連隊本部及一

中隊(一小隊欠)

工兵第十一大隊本部及

第一中隊

衛生隊

連隊(第二中隊欠) 八此命令ニ基キ、午後六時頃ヨリ兵^(マ)一小隊ノ援助ヲ借り

前進、路ノ修築及掩体ノ構築ヲナシ、翌二十七日午前四時三十分悉ク其ノ陣地

二就キ、射撃準備ヲ完了ス、

二十七日朝来濃霧深クシテ呎尺ヲ辨セズ、タメニ我運動ヲ敵ニ秘スルノ利アラ

ント雖、拂曉ヨリ攻撃ヲ開始スベキ我左翼隊及九師団方面毫モ砲声ヲ聞カズ、

露軍八諸種ノ徴候ニヨリ、日本軍ガ近ク攻撃スベキヲ知り、第一線ノ兵力ヲ増

加セリト云フ、

五、右翼隊八、左翼隊二連撃シ、前項ノ攻撃ヲ援助シ、

其ノ右翼八、剣山ノ西南ニ走ル稜線ノ前端附近ヲ

占領スベシ、

第九師団ト連絡スベシ、

剣山ニハ必要ノ時機迄一部隊ヲ残シ守備セシムベ

シ、

六、野戦砲兵隊八、明拂曉迄ニ黄泥川、大上屯ノ北方

高地ヨリ其ノ西北ニ亘ル高地線附近ニ於テ広く敵

地ヲ射撃シ得ル如ク占位スベシ、

七、特殊砲兵隊八、明拂曉迄ニ左、右翼隊第一線ノ後

方ニ於テ広く敵ノ陣地、特ニ王家店南北高地附近

ノ敵砲ヲ射撃シ得ル如ク占位スベシ、

以下略ス、

午前七時三十分濃霧漸ク晴ルニヤ、双頂山上ノ砲兵先ツ霹靂ヲ破リテ砲火ヲ開

キ、続テ陸戦海軍砲及第三中隊等盛ニ射撃ヲ初メ、王家店付近ノ砲兵又之ニ応

ズ、

午前九時左翼隊ノ歩兵八、老坐山北方新月形ノ高地ヲ占領シ、老坐山方向ニ攻

撃前進ス、

午前十時王家店北方ノ敵砲(五十七密砲)二門我ニ向ヒ射撃ヲ開始ス、依リテ

第一中隊ヲシテ之ニ応戦セシム、同十時二十五分第四中隊亦此砲戦ニ参加シ、

遂ニ之ヲ沈黙セシム、

午前十一時十五分我右翼隊ノ第一線八剣山ノ南端付近ヨリ、大石洞東方高地ヲ

経テ、大石洞東方高地ノ脚ニ達ス、此ノ頃ヨリ王家店南方及林家庄兒北方ノ

敵砲兵盛ニ我陣地ヲ砲撃ス、

正午頃左翼隊八、老坐山ノ大部ヲ占領シ、第二中隊八、双頭山^(頂力)ノ陣地ヲ撤シ、

敵ノ砲火ヲ冒シテ前進ノ途ニ就ク、

午後二時頃ヨリ師団八、大白山ノ本陣地攻撃ニ着手ス、依テ我連隊八、盛ニ攻

撃点ヲ射撃シ、敵砲兵亦之ニ応ズ、就中第六中隊八、林家庄北方ノ敵砲兵ヨリ

最モ猛烈ナル集中砲火ヲ受ケ損害続出ス、其ノ間最モ沈着勇敵^(マ)ニ戦闘中ナリシ

高石少尉八、全弾頭部ニ命中シテ名譽ノ戦死ヲ遂ゲタリ、

午後四時十分第二中隊八、大白山ノ正面前約千米ノ高地ニ放列ヲ布置シ、最モ

有効ナル砲火ヲ敵ノ本陣地ニ集中シ、我歩兵八、今ヤ敵陣地ノ山脚ニ接シテ、

突撃ノ姿勢ニアリ、

午後五時頃ヨリ彼我ノ銃砲戦ハ、極度ニ達シ損害続出ス、就中第一中隊八、敵

ノ十字火ヲ受ケテ損害最モ多シ、然レドモ砲手一名ニ減スルモ尚射撃ヲ止メズ、

自若トシテ頗ル勇敵^(マ)ニ動作セリ、

此ノ日ノ戦闘ハ歩砲兵協同動作比較的円満、陸戦重砲隊八朝来間断ナク敵砲兵

ト対戦シテ、大ニ我師団ノ攻撃ヲ援助セリト雖、敵ノ陣地甚堅固ニシ、而モ其

ノ前岸峻峻ナリシヲ以テ、遂ニ突撃ヲ実行スルニ至ラズシテ日没ニ至リ、諸隊

八現在ノ姿勢ヲ以テ夜ヲ撤スルコトナレリ、

当日ノ戦闘ニ於テ我連隊ノ損害八、戦死将校以下九、負傷下士卒二十三、駄馬

四頭ナリ、

此ノ日彼我ノ海軍八、有力ナル艦隊ヲ以テ此陸戦ニ策応シタルモ、両軍共二陸海軍間ノ連絡不十分ナリシタメ、其ノ成果八敢テ偉大ナリト云フヲ得ズ、然レドモ士氣上ニ及ボシタル交感ハ、決シテ尠少ニ非ザリキ、

二十六日ニ於ケル日本軍ノ攻撃ハ、概シテ不成功ニ終リ、唯老坐山方面ニ於テ若干ノ成果ヲ得タルノミ、而シテ露軍当日ノ損害ハ、三百五十八ナリシト云フ、午後十一時ニ至リ翌日ニ閉スル師団命令ヲ受ケ、其ノ要旨左ノ如シ、

一、敵八、依然旧陣地ヲ占領シアリ、

第九師団八、南谷溝西方高地ヲ占領セリ、

我左翼隊八、本夜中ニ老坐山南方高地ニアル敵兵ヲ撃攘スル等、

二、師団八、現在ノ位置ニ在テ撤夜シ、明日午前四時三十分ヨリ本日ノ如ク攻撃ヲ実施セントス、

此ノ夜連隊八、夜暗利用シテ掩体ヲ堅固ニシ、連隊長以下皆其陣地ニ在リテ假眠セリ、又歩兵線ニ於テハ、互ニ小希図ノ夜襲ヲ行ヒ、終夜銃声絶間ナシ、此ノ間第二中隊八、約千米南方二陣地ヲ変換シ、益々敵ニ接近セリ、

二十七日午前四時三十分戦闘準備ヲ整ヘ、午前七時砲声ヲ開始ス、敵砲兵亦之ニ応ズルコト昨日ノ如シ、独リ歩兵八、堅固ナル工事ニ拠ルヲ以テ、我之ヲ射撃スレバ忽チ掩体ノ裡ニ其ノ姿ヲ没シ、射撃ヲ中絶スレバ平然立テ我ヲ射撃ス、此ノ如キ状況ナルヲ以テ、砲火ノ命中ハ確實ナリト雖、功力之ニ伴ハズ、徒ニ弾薬ヲ浪費スルノ虞アリシヲ以テ、一時射撃ヲ中止セリ、実ニ掩体ニ拠ル敵ニ對シテハ、殊更ニ歩砲協同スルニ非ザレハ、常ニ此ノ如キ状況ニ陥ルモノナルヲ感ジタリ、

午前九時頃第一、第三中隊八、第二中隊陣地ノ方面ニ陣地ヲ変換セントスルノ希図ヲ有シタルモ、之ヲ実行スルニ至ラザリシハ、攻撃進捗上最モ遺憾トスル処ナリ、若シ此ノ希図ニシテ現実センカ、昨日來成功セル左翼隊方面ノ占領地区ヲ漸次拡張シテ、遂ニ八敵ノ右翼ヲ包圍スルニ至リシナラン、

午前九時三十分敵ノ艦艇約十艘電王塘沿岸ニ來リ、我左翼隊及師団司令部所在地タル歪頭山附近ヲ射撃ス、殊ニ我白砲隊八猛烈ニ其ノ砲撃ヲ受ケ、遂ニ黄泥

川、大上屯附近ニ退却スルノ止ヲ得ザルニ至レリ、

午前十一時我歩兵攻撃前進ニ移ルベキ師団命令ニ接シタルヲ以テ、連隊八再ビ立ちテ猛烈ナル砲撃ヲ加ヘタルモ、我歩兵八毫毛前進ノ模様ナカリシヲ以テ、更ニ射撃ヲ中止セリ、

午後一時次ノ師団命令ニ接ス、

一、師団八、大白山東方一帯ノ高地ヲ占領セントス、

二、全砲兵八、同ジク高地上標高195附近ヨリ南方二巨ル敵陣地ヲ破壊スル目的ヲ以テ、午後五時ヨリ猛烈ニ之ヲ攻撃スベシ、

三、左翼隊八、此ノ砲撃ノ結果ヲ待チテ直ニ攻撃スベシ、

午後三時我艦隊現出シ、日進春日八挺身シテ敵艦ニ迫ル、敵ノ艦艇八僅カニ二射シタルノミニテ西方ニ向ヒ航走セリ、

同時歩兵第二十二連隊ヨリ左記要旨ノ通報ニ接ス、

当面ノ敵陣地ハ頗ル堅固ニシテ、其側防法又周到ナリ、散兵壕ニハ掩蓋及銃眼ヲ備ヘ、其銃眼ニハ開閉自在ノ扉ヲ設ケアリ、此ノ如キ状況ナルヲ以テ、我歩兵敵ニ肉迫スルモ砲声ヲ止メズ、且彈丸八榴彈ヲ用フルヲ可トス、

茲ニ於テ第五中隊ノ外悉ク榴彈ヲ準備シ、午後五時ヨリ全隊同時ニ射撃ヲ開キ敵陣地ノ大部ヲ破壊セリ、然レドモ我歩兵ノ攻撃ハ尚其機運ニ達セザルモノノ如ク、更ニ前進ノ模様ナキヲ以テ、弾薬ノ浪費ヲ慮リ射撃速度ヲ緩ニセリ、

午後六時敵ノ全砲兵八、我陣地ニ向ヒ最モ猛烈ニ疾風射ヲ加ヘ、第三中隊ノ損害甚ダシ、之ヨリ先キ歩兵部隊ト連絡ノタメ派遣セシ岡島中尉八、頭部ニ微傷ヲ負ヒ、最モ勇敢ニ戦闘セシ林中尉八、頭部ニ敵彈ヲ受ケテ壯烈ナル戦死ヲ遂ゲ、吉松中尉亦負傷ス、此ノ間我忠勇ナル下士卒八、勇敢ナル動作ヲ以テ、各其ノ任務ニ従ヒ、損害続出スルモ敢テ顧慮スル所ナク、平時鍛鍊ノ成果ヲ遺憾ナク此ノ戦場ニ發揮シツヽアリ、

午後七時師団命令ニ基キ更ニ射撃速度ヲ増加シ、午後八時五分機関銃破壊ノ目的ヲ以テ、數回ノ斉射ヲ行フ、此クノ如クニシテ日全ク没シ、射撃ヲ停止セリ、此ノ日ノ戦闘ニ於テ林中尉以下戦死者五名、負傷者廿二名、馬匹ノ損害十四頭ニ達ス、

王家屯附近ニアリシ敵砲兵八、二日二巨リ僅二十二名ノ戦傷者ヲ生ジタルノミ、然レドモ日本軍八此ノ砲兵ノタメニ受ケタル損害八、少クモ二、三百ヲ下ラザルベシ、又以テ工事ノ必要ト迅速ナル射撃速度ノ必要ナルヲ知ルニ足ラン、午後十一時四十分師団命令ニ基キ次ノ要旨ノ命令ヲ下ス、

一、敵八、依然旧陣地ヲ占領ス、

我左翼隊八、本夜中ニ老坐山南方ニアル敵ヲ撃攘スル筈、

二、師団八、現在ノ位置ニアリテ夜ヲ徹シ、明日午前四時三十分ヨリ本日ノ如ク攻撃ヲ実施セントス、

三、各中隊八、現在ノ陣地ニ工事ヲ加ヘ、明日午前四時三十分迄ニ射撃準備ヲ完了スベシ、

四、各中隊段列及連隊段列八、午前四時三十分迄ニ西部猪圈子溝ニ至リ、彈薬ノ補充ヲ受クベシ、

斯テ此ノ日ノ戦鬪モ不成功ニ終レリ、当時天候頗炎熱ニシテ蒸熱キコト云ハン方ナシ、然ルニ涼ヲ納ルベキ一樹ノ影モナク、湯ヲ医スベキ一掬ノ水モナシ、只時々段列ヨリ搬送セシ多少ノ湯茶ト携帯セル重焼麵包ニ依リテ漸ク飢渴ヲ凌ギシノミ、

当時第二中隊ノ陣地八、毫モ敵ノ砲彈ヲ受ケザリシタメ、士卒ノ態度恰モ平時ノ演習ニ於ケルガ如ク沈着シテ照準シ、機ヲ見テ発射セシヲ以テ、其ノ命中頗ル確實、タメニ第一線歩兵ノ屢々拍手シテ満足スルヲ見タリ、而モ敵前千米ニ接近シ、敵ノ小銃火ニ曝露シツツ動作セシニ係ラズ、一名ノ負傷タニナカリシ八、全ク其陣地ノ良好ナリシニ依ル、是レ予ガ先ニ第一、第三中隊陣地ヲ当面ニ変換スルノ有利ナルヲ説キシ所以ナリトス、

更ニ眼ヲ右方ニ転センカ、新ニ到着セル第九師団八、最モ堅固ナル安子嶺附近ノ敵陣地ニ向ヒ、寄セテ八返又波ノ如ク白昼猛烈ニ突撃シツツアルヲ望見シ、左方老坐山ヲ眺ムレバ、逃ゲ後レタル敵兵ガ窮鼠ノ如キ姿勢ニテ死物狂ニ奮闘シツツアルヲ見ル、其ノ他敵ノ艦艇十九艘八、儼然トシテ敵ノ右側海面ヲ警戒シ、且ツ猛烈ニ我ヲ縦射シテ、其射弾八遠ク第九師団ノ方面ニ及ベリ、又我歩兵八敵前数十米ノ山腹ニ匍匐シテ、我砲撃ノ成果ヲ待チツツアルモノノ如シ、

此ノ如クシテ同夜再ビ旧陣地ニアリ、仰テ天空ヲ眺ムレバ、月光澄ミ渡リ、戰場ノ光景軼々崇敵ヲ極メ、前面一帯ノ地八絶ヘズ銃声盛ニシテ徹宵眠モヤラズ、戈ヲ枕ノ仮寝ニテ暫時微睡ム暇モナク、忽チ聞ユル突撃ノ声、続ル万オノ音、「君が代」ノ喇叭八唳唳トシテ夜陰ヲ破リ、其調崇高神氣骨髓ニ徹ス、即チ立テ万歳ヲ唱ヘ踴躍シテ友軍ノ成功ヲ祝ス、之レ実ニ勇敢ナル内野歩兵少佐(今大佐)ガ其ノ大隊ヲ提テ敵陣ニ突入シ、逐次敵陣ヲ攻略シツツ、今ヤ其ノ大部ノ目的ヲ達シタル時ノ状況ニシテ、天明ニ至レバ前面一帯ノ高地ニ八日章旗ノ翻翻トシテ朝風ニ翻ルヲ見ル、

二十七日夜「ステッセル」中將八、「フォーク」少將、「コンドラテンコ」少將ト協議ノ結果、更ニ明二十八日抵抗ヲ繼續スルニ決シ、「ステッセル」中將八、所要ノ区署ヲ命ジタル後、守兵ノ二日間ニ巨ル頑強ナル抵抗ヲ賞スル言辭ヲ電報ヲ以テ全軍ニ通報シタル後、要塞ニ帰還セリ、

右翼地区ニ於テ八、上述ノ賞詞ヲ部下ニ伝達スルタメ、「セシヨノフ」大佐八、大白山ノ山麓ニ軍樂隊ヲ集メ国歌ヲ奏セシメ、各部隊八、「ウラー」ヲ叫ンデ之ニ和シタリ、

既ニシテ喊声止ムヤ、恰モ午後十時日本軍八、大白山ノ中央ニ向ヒ夜襲シ来リ、散兵壕ノ一部ヲ占領シ、以テ機関銃一門ヲ茲ニ搬送セリ、「セシヨノフ」大佐八、屢々逆襲ヲ実施シタルモ、遂ニ其ノ目的ヲ達セザリキ、此ノ日ノ戦鬪ニ於テ露軍約一千名ヲ失ヘリ、

二十八日午前六時四十分第一大隊(第二中隊欠)八前進ヲ起シ、第二大隊モ亦続テ前進シ、共ニ大白山附近ニ陣地ヲ占領シテ追撃射撃ヲ行ヒ、敵兵射界ヲ脱スルニ至ルヤ大隊毎ニ梯進シ、退却中ナル敵歩兵ニ向ヒ猛烈ナル射撃ヲ加ヘ、後第五中隊八右翼隊ニ、第一中隊八左翼隊ニ属シテ第一線ニ出デ、他八本隊トナリ大石洞ニ集合シテ純然タル雨井露営ヲナセリ、

此ノ日ノ追撃八、一昨日来ノ戦鬪猛烈ナリシト輕拳猛進スルノ不利ナルヲ感じタルガタメ、野戦ニ於ケルガ如ク猛烈果敢ニ遂行セザレザリキ、是レガタメ敵八比較的整然トシテ退却シ、其ノ泰然タル狀況寧口驚クニ堪ヘタリ、殊ニ穩氣ナル露軍ノ一軍医八、人力車四十担架若干ヲ指揮シテ我眼下ニ突撃シ、委棄シ

タル死傷者ヲ収容シテ平然退却セントシタル如キ露兵ナラデハ出来難キ仕事ナルベシ、此ノ戦鬪ニ於テ第一中隊軍曹奥村佐吉、上等兵小笠原長重、二等卒井上清夫、同青野武平八軍司令官ノ感状ヲ、又第三中隊ノ伍長三木恒市、上等兵富士忠平、全横内只之祐、一等卒篠原磯吉八師團長ノ賞詞ヲ受ク、此ノ戦ニ於ケル露軍ノ損害ハ、戦死二百五十五、負傷千六百八十八、失跡九七、計二千四十二シテ、是ニ対スル我全軍ノ損害ハ、二千九百十九(内第一師團三百二十一、第九師團七百四十八、第十一師團二百、後備歩兵旅團六百五十)、馬百七十七頭、又我連隊ノ損害ハ、戦死十六、負傷四十七、計六十三(微傷ヲ含ム)、馬匹十六頭、又其ノ消費彈藥無慮八千発ノ多キニ達シタリ、此ノ戦鬪ニ関シ左ノ勅語及令旨ヲ給フ、

勅語

第三軍八、旅順要塞ノ前進陣地ニ対シ、屢々險要ヲ冒シ、劇戦数日ニ亘リ、遂ニ敵ヲ本防禦線内ニ撃退セリ、

令旨

第三軍八、旅順要塞ノ險ヲ冒シ、連日猛撃漸次其ノ功ヲ奏スル趣 皇后陛下ノ歡聞ニ達シ、我將校下士卒ノ忠勇ナルヲ深く御感賞アラセラル、

第四章 七月三十日ノ前進

大白山附近ニ於テ敗レタル敵ハ、逐次旅順要塞ニ退却シ、各其ノ前地ニ於テ主要ノ地区ヲ領有シ、以テ我軍ノ前進ヲ拒止セントセリ、師團八此ノ敵ニ対シニ縦隊トナリ大石洞竜頭道、大白山山川柳道ヲ前進シ、八月二十九日夜第二大隊ハ右縦隊ニ、連隊本部及第一大隊ハ左縦隊ニ属シ各其主道路ヲ前進シ、全夜右縦隊八林家庄尻附近ニ、左縦隊八鮑魚肚子東南約千米ノ高地ニ陣地ヲ構築セリ、翌三十日払曉工事をナラントスルヤ突然前進ノ命アリ、依テ急激段列ノ位置ニ歸リ武装ヲ整ヘテ集合地ニ至リ、次テ行軍序列ニ入りテ右縦隊八蘇家大峯ニ、左段列八山川柳ニ向ヒ前進ス、

此ノ日ノ行軍ハ其距離大ナラズト雖モ、事不意ニ出デント要塞砲火ニ曝露シテ前進センガタメ、士氣上不利ノ交感ヲ受ケタルコト尠カラズ、然レドモ其ノ損

害ハ微少ニシテ何レモ目的地点ニ達シ、第二大隊ハ蘇家大峯西南方高地ニ、第一大隊ハ第一中隊ヲ以テ山川柳西方独立高地ニ、第二、第三中隊ヲ以テ其ノ東側五百米ノ山腹稜線ニ陣地ヲ占領シ、各其附近ニ露營セリ、

鞍子峯附近ノ前進陣地既ニ日本軍ノ有ニ帰セシヨリ、露軍ハ今ヤ一挙要塞内ニ引退スベキカ、或ハ鳳凰山附近ノ陣地ニ拠リテ抵抗ヲ試ムベキカノ問題ヲ決セザルベカラザルニ至レリ、此問題ニ対シ第四師團長ハ、此ノ如キ設備不十分ナル陣地ニ留マルハ、徒ラ二兵力ヲ損スルニ過ギズトノ理由ノ下ニ、一挙要塞内ニ退却センコトヲ主張シ、要塞司令官「スミルノフ」中將ハ、此ノ線ニシテ一度日本軍ノ手中ニ帰セバ、防備未ダ完全ナラザル要塞ノ陥落ヲ速力ナラシムベシトノ理由ニ依リ、絶対ニ其ノ退却ヲ拒否シ、遂ニ第四師團全部及第七師團ノ一部、計歩兵五十四中隊、火炮七十門ヲ以テ、大孤山ヨリ干大山ヲ経テ鳳凰山ニ亘ル線ヲ守備スルニ決シ、其ノ部署ニ就キタルモ日本軍ノ前進意外ニ速力ナリシト陣地ノ設備充分ナラザリシタメ、七月三十日不利ナル戦鬪ヲ交ヘ、死傷六百六十七ヲ生シテ、干大山、鳳凰山ノ線ヲ敵手ニ委シ、独リ大小孤山ヲ維持スルヲ得タリ、

此ノ日ノ戦鬪ニ於テ、我師團ノ任務ハ、大小孤山ノ前地ヲ占領シ、第一、第九師團ノ攻撃ヲ容易ナラシムルニアリタルヲ以テ、全軍ノ死傷千三百六名中、我師團ノ損失ハ、僅ニ四十七名ニスキス、然レドモ我第三軍八、此ノ戦鬪ヲ以テ全ク敵ヲ要塞内ニ圧迫スルヲ得タリ、是ヨリ攻囲線ヲ編成シ、第二期要塞戦ニ移リ、愈々重砲鉄火ノ下ニ彼ガ死名ヲ制スベキ一大快戦ヲ交ヘントス、

当時氣候ハ、將ニ炎暑酷烈ノ時機ニ属シ、而モ連日数昼夜攻戦ノ事ニ從ヒ、雨露ニ浴シ、給養及睡眠不足セシヲ以テ、自心ノ疲労尋常ニ非ズ、剩ヘ此ノ附近一帯ノ地水質極メテ不良、且群蠅発生シテ衛生上ノ不利最モ甚シ、從テ極力之ガ改善ニ努力セシモ、尚日々数十名ノ入院患者ヲ生ズルノ景況ニアリ、

当陣地ハ、大小孤山ヲ去ル約三千米ニシテ、要塞本防禦線ヨリ五六千米ノ間ニアリ、從テ精良ナル眼鏡ヲ用ユル時ハ、敵ノ一挙一動歴然トシテ指呼ノ間ニアルガ如ク見ユ、又夜間ハ探照燈光弾ノ光灼然トシテ目モ眩マン、計リニテ其ノ美觀莊嚴ノ状要塞戦ニ於テ初メテ見ルヲ得ベシ、其他昼夜間断ナキ敵ノ砲撃ハ、

陣地及宿営地ヲ騷擾セシメ、砲身大ノ巨彈身辺ニ落達スルトキハ、恰モ地震ニ揺ラレタル如ク感ス、加フルニ敵ノ海軍出動シテ屢々我陣地ヲ縦射スルモ、又奈何トモスル能ハズ、専ラ陣地ヲ堅固ナラシムルニ努メテ戦機ノ熟スルヲ待テリ、

八月四日我第二軍八、敵ヲ大石橋ニ庄迫シ、海城方向ニ撃退シタル通報ニ接ス、

第五章 大小孤山ノ攻撃

七月三十日我軍第一ノ攻圍線ヲ占領スルヤ、直ニ一種不快ノ感ヲ抱カシメタルモノハ、実ニ大孤山ノ未占有ニアリ、是レ同地ハ、啻ニ我陣地東方面ノ約半部ヲ瞰制シ、我希圖ヲ察知セラルヽ不利アルノミナラズ、長射程ヲ有スル山上ノ野砲六門ハ、時々我第九、第十一師団ニ鈔カラザル危害ヲ与フルノ不利アレバナリ、然レドモ其ノ攻略ハ、我師団作業ノ進捗ト伊フニ非ザレバ、永ク孤立ノ状態ニ於テ要塞砲火ヲ集中セラルヽノ恐レアリ、然ルニ今ヤ恰モ其ノ好機ニ適合ス、依テ第三軍司令官ハ、之レガ攻撃ヲ第十一師団長ニ命ジタリ、

従来大小孤山ニハ混成ノ小部隊留マリアリシガ、八月六日東狙兵二個大隊之ニ代リ、大孤山ニ歩兵五中隊野砲四門、小孤山ニ歩兵三中隊野砲二門ヲ配置セリ、

八月七日師団命令ニ基キ左ノ命令ヲ下ス、

連隊命令 八月七日午後一時三十四分

於山川柳

一、我前面ノ敵ノ防禦工事ハ、益々堅固ノ度ヲ加フルヲ見ル、
我師団八、攻圍線ヲ大小孤山附近ニ進メントス、之ガタメ野戦重砲兵第一大隊(十二門)及我師団並ニ第九師団ニ属スル臼砲隊八、軍ノ直轄トナリ、午後四時ヨリ砲撃ヲ開始スル筈、

右翼地区隊(歩兵第十旅団野戦砲兵第二大隊ヲ基幹トス)ハ、^(山次カ)団子山ヨリ大孤山北斜面ニ巨砲ヲ、左翼地区隊(歩兵第二十二旅団野戦砲兵第一大隊ヲ基幹トス)ハ、大孤山頂上ヨリ小孤山ヲ經海岸ニ巨砲線ニ前進スル筈、
二、連隊八、現在ノ陣地ニ在リテ特種砲兵隊ト協力シ、攻撃ヲ援助セントス、

依テ午後三時三十分迄ニ射撃準備ヲ完了スベシ、

八月七日午後四時四十分特種砲兵及野戦砲兵八、共ニ大小孤山ニ向ヒ射撃ヲ開キ、前面一帯ノ要塞備砲亦之ニ応シテ其ノ状壯烈ヲ極ム、此ノ間我歩兵八陸續前進シ、大小孤山北脚ニ於テ深サ殆ンド身長ヲ没スル氾濫ヲ涉リ、漸次大小孤山北麓ニ集合ス、時シモアレ篠ツク雨ハ沛然トシテ降り切り、全身濡レザル処ナク不快云フ計ナシ、午後十一時三十分歩兵第十二連隊八、一時大孤山頂ノ一角ヲ占領シタルモ、忽チ有力ナル敵ノ逆襲ヲ受ケ、遂ニ退却スルノ已ムヲ得ザルニ至リ、僅ニ其北麓散兵壕ヲ保持ス、

此ノ時ニ當リ、我第一大隊八、左翼地区隊長ノ通報ニ信賴シ、大孤山ノ領有確實ナルモノト判定シ、是レヲ支持スルタメ八日払曉陣地ヲ撤シ、第二、第三中隊八、約千米前進シテ新ナル陣地ニ移リタリ、

第一中隊及第二大隊八依然旧陣地ニアリ、然ルニ天明ニ至リ大孤山上ノ敵砲兵戦ヲ挑ミ、次テ敵ノ艦艇我側面ニ迫リ、第一大隊陣地ヲ夾撃ス、殊ニ大小孤山北麓ニアリシ我歩兵八、腹背敵ヲ受ケテ損害続出シ、其ノ慘状見ルニ忍ビザルモノアリ、即チ連隊八特種砲兵ト協力シ、敵ノ海軍及大小孤山上ノ敵砲兵ヲ猛烈ニ射撃セリ、敵ハ我重砲タル十二冊榴弾砲十二門、臼砲二十四門ノ位置ヲ偵知シ得ザリシモノノ如ク、其ノ射弾ハ悉ク我連隊陣地ニ集中シタメニ、微々タル山砲ヲ以テ要塞ノ巨砲ト対戦シ、非常ノ苦戦ヲ交ヘタリ、然レドモ間接射撃ノ陣地ヲ採用シタル關係上、我連隊ノ損害ハ僅ニ四名ニ過ギザリキ、

午後七時大孤山北麓ノ我歩兵八逐次顛頂ニ向ヒ、決意前進スルモノノ如シ、依テ特種砲兵隊及我連隊八、主力ヲ以テ大孤山頂ニ向ヒ、砲火ヲ集中シ、一部ヲ以テ小孤山上ノ敵ヲ压制シ、其効力殊ニ著シ、從テ我歩兵ノ攻撃前進意外ニ容易ニシテ、暫ク敵ニ接戦ヲ交ヘタル後、僅少ノ損害ヲ以テ遂ニ之ヲ撃退シ、確實ニ大孤山ヲ占領スルヲ得タリ、此占領ノ一刹那、敵ノ要塞砲火ハ忽チ大孤山上ニ集中シ、山形將ニ改マラントスルノ壯觀ヲ呈シ、吾人ハ大二友軍ノ損害ヲ憂慮シタルモ、事実全ク之ニ反シ我損害極メテ微少ニシテ、却テ退却中ノ敵兵ヲ損傷セリト云フ、此ノ如キ状況ナリシヲ以テ、小孤山方面ノ戦闘モ亦頗ル有利ニ指導セラレタリト雖モ、砲火ノ威力ヲ受クルコト稍渺ク、且ツ日没ニ達シ

タルヲ以テ、歩兵第四十三連隊長八終夜苦戦奮闘、午前四時半独力ヲ以テ遂ニ之ヲ占領スルニ至レリ、

其後敵八大小孤山ヲ回復センガタメ、屢々逆襲ヲ企図セントスル徵候アリシヲ以テ、大小孤山ノ中間各地ヲ掃射シ得ル如ク、第二、第三中隊ハ其陣地ヲ郭家溝南方ニ変換シ、第一中隊モ亦八日夜ヨリ其陣地ヲ殆ンド之と同線上ニ前進セシメタリ、

大小孤山ノ攻撃ハ、敵ノ要塞砲火ノ下ニ戦闘シタルヲ以テ、砲戦次第ニ苦境ニ趣キ、一弾砲車ニ命中センカ殆ンド全滅ヲ免レザル状態ナリシモ、遮障陣地ヲ占有シタル結果、敵弾ノ命中甚々稀ニシテ、全攻撃間連隊ノ受ケタル損害ハ、僅ニ五名ニ過ギス、又消費弾薬ハ、榴霰弾二千三百二十二発、榴弾二百十六発ニシテ、漸次弾薬ノ欠乏ヲ感スルニ至レリ、又試ニ重砲兵三十六門ノ七、八両日間ニ消費セシ弾薬ヲ計算スルニ、実ニ五千二百五十八ノ大キニ達ス、又以テ弾薬補充ノ困難ナルヲ知ルニ足ルベシ、

此ノ戦闘ニ於テ我師団ノ死傷千五百十二、而テ其多クハ敵ノ海軍砲火ニ致サレタルモノトス、

八月二日附ヲ以テ溝口中尉八八尉ニ、津曲、大屋敷、松本ノ三少尉ハ中尉ニ昇進シタル通報ニ接ス、

八月九日中尉久熊重第三中隊ニ転ジ、特務曹長豊島忍士官勤務ニ進ミ第二中隊小隊長トナル、

八月十日第二大隊八龍溝ノ北方ニ陣地ヲ変換ス、此ノ日代用馬卒十七ノ補充ヲ受ク、依テ第四糧食縦列ヨリ馬卒代用トシテ臨時編入セシ輜重輸卒十六名ヲ全縦列ニ帰還セシメタリ、

八月十一日中尉石垣唯一、予備砲兵少尉加藤宗太郎(後中尉ニ進ム)、特務曹長西村竹五郎(今中尉)以下計手一、下士九、上等兵十二、一等卒百十六名、馬卒二、馬匹二十三頭ノ補充人馬到着ス、依テ石垣中尉ヲ第六中隊ニ、加藤少尉ヲ連隊段列ニ、西村特務曹長ヲ第二中隊ニ編入シ、下士卒八後備兵二十二名ヲ縦列ニ、他ヲ連隊段列及各中隊ニ配属ス、

当日敵ノ艦隊数艘稍然トシテ郭家溝南側ヲ旅順港ニ向ヒ徐航シアルヲ見ル、而

モ敢テ砲撃ヲ加ヘズ、衆皆之ヲ怪ム、

往來露国海軍ハ、屢々出テテ其ノ陸軍ニ協同シ、小成功ヲ得ルニ汲々タリシガ、此ノ頃諸艦ノ応急修理粗々成レルニ由リ、皇帝ハ太平洋艦隊ニ封鎖ヲ破リテ浦塩斯德ニ冒進シ、同地ノ海軍ト共ニ大ニ活動スベキコトヲ電命セリ、茲ニ於テ從來ノ方針ヲ變更シ、「ウイトゲフト」司令長官ハ戦艦六艘、巡洋艦四艘、駆逐艦七、病院艦一ヲ率ヒ、八月十日出動シ、不幸ニシテ東郷艦隊ノ撃破スル所トナリ、翌十一日戦艦五、巡洋艦一、水雷艇三八、旅順ニ帰航シ、他ハ膠州湾上海及西貢ニ至リテ兵備ヲ解カレ、「オウイック」八樺太ニ航走シタル後、我艦隊ニ撃沈セラレ、斯ノ如クシテ旅順艦隊亦奮ハザルニ至リシヲ以テ、専ラ力ヲ陸上防禦ニ用ヒ、陸海連合シテ陸正面ノ戦闘ニ従事スルニ至レリ、

八月十三日左ノ訓示ニ接ス、

訓示

戦地ニ於ケル人畜屍ノ処置ハ、軍人衛生上最モ緊要ナル事項ニシテ、戦地者埋葬法ノ規定アルニ係ラズ、往々塋穴ノ深サ頗ル浅キモノアリ、又水源ニ近接シテ埋葬スルモノアリ、加之埋葬ノ際死者ノ着装甚々整正ヲ欠ギ、死者ノ霊ニ対シ敬意ヲ欠ギシモノアリシヤニ聞ク、是レ衛生上並ニ倫理上等閑ニスベカラザル件トス、依テ自今戦死者埋葬規則ヲ遵守シ、一層其取扱ニ注意スベシ、

第三軍司令官 乃木希典

軍ノ最右翼ニ動作中ナル第一師団ハ、其ノ戦線ヲ前進セシメ、以テ第九、第十一師団ノ主攻撃ヲ容易ナラシメンガタメ、八月十三日ヨリ十五日ニ亘リ約千二百ノ犠牲ヲ払フテ干大山、李家屯及東方溝南方一帯ノ高地ニ巨ル線ニ進出シ、其ノ目的ヲ達ス、